

浄瑠璃本（通し本）の配役書入本の効用

—— 付リ・上中編の補遺と年月順総索引 ——

はじめに

浄瑠璃本（通し本。いわゆる丸本）をみていくと、稀に板面上部の空白部に、多くは朱筆で、太夫・三味線弾きの名前を書き入れた本に行き当たることがある。これらを仮に「配役書入本」と呼称したい。

筆者はこれまで、「浄瑠璃本（通し本）の配役書入本について」と題して、上編（あゝこ）、中編（さゝは）、下編（ひゝら）に分けて、二九三点を報告してきた⁽¹⁾。本稿には、

・ 右三編に漏れる資料についての補遺

・ 右三編と補遺を通覧可能とするための総索引

を付載して、当該資料の活用を促すためのものである。

なお(7)頁以下に補遺として示す資料は、上編発表以降に調査した分のほか、迂闊にも載せ忘れたもの（データベース化しているとはいえ、操作する人間の粗忽故）をまとめた。

また(19)頁以下に追加として示す資料は、所蔵機関において「未整理である」として、現在は閲覧させない、とするもの。代々の担当者に一般公開を申し入れているが、十有余年を経て、なお放置され続けている（残余の作業としては、三百冊未満の原本に資料番号を押捺し、検索カードを作成するばかり）。公開を待つで紹介するのが本来と思うが、現況では資料の廃棄すら憂慮されるので、所蔵機関名を伏せ、しかし資料の内容自体は紹介することとした。当該所蔵機関におかれては猛省の上、一日も早い閲覧提供を願いたい⁽²⁾。

分割掲載のほか、補訂・追加もあつて、一覽性に乏しい資料紹介となった。このため(29)頁以下に「浄瑠璃本（通し本）の配役書入本の年月順総索引」をまとめた。本編の配列は、当該資料名の読み順としたので、索引では資料の伝える興行の年月日順に並べた。

本稿では、筆者が捉えるところの、配役書入本の効用、利用の用途につき略述する。結論をいえば、人形浄瑠璃文楽の上演演目の復活・復旧を計るにおいて最大の効果を発揮する資料である、と筆者は確信している。

一、配役書入本の資料的価値

配役書入本の資料的価値は、第一に興行資料としての側面にある。

江戸時代、人形浄瑠璃の「番付 ばんづけ」（こんにちのポスター・チラシに相当する）では、太夫については語る段・役場、人形遣いについては担当する登場人物名・役名を記した。一方、三味線弾きについては、出演者（時によって出演しないが所属する全員）の連名を示すのみで、「誰がどこを弾いたか」は基本的に記さないのが原則であった。「番付」では把握することのできない、太夫と三味線弾きの組み合わせを、配役書入本は伝えるのである。

『義太夫年表 近世篇』でも偶会した配役書入本三点〔080〕〔214〕〔224〕に触れていて、当該資料の存在自体は知られていた。旧稿三編および本稿では右三点を含む、近世期二三〇点を紹介した（近代は一三九点）。

近世期にも太夫・三味線弾きの組み合わせを示した資料も稀にはあつて、

・ 番付〔092〕『五天竺』

神 津 武 男

・通し本の役割（164）『大功艶書合』

・絵尽（179）の次『道中亀山噺』

・『弥太夫日記』（017）[024] [049] の次 [082] [129] [130] [178] [288]

の十一例は、配役書入本という傍証を得た事例となるが、これを除く近世期二一九点は配役書入本によって初めて、興行の内幕情報・配役を補い得たのである。

またそもそも配役書入本によって初めて存在が知られた興行記録（020）の次の次 [051] の次 [061] [054] [072] の次 [091] の次 [154] [162] の次 [278] [283] [292] もあり、これらの点から配役書入本の「興行記録」としての資料価値は大きいといえよう。

第二の価値は、義太夫節の古楽譜としての側面にある。配役書入本には、単に配役のみを記した例もあるが、分量はわずかでも「朱」（三味線譜のこと。朱筆で記されることから、「朱」と略称する。本稿では以下、朱譜と記す）を伴うものがある。ひと興行の全体を記録した事例もあつて、この点に配役書入本の朱譜の、最大の価値がある。

第三の価値は、朱譜の変遷を探り得る可能性である。同一の作品であつて、年次・劇団の異なる興行の配役書入本が残る事例が少なくない。これらについては、年次順に並べて、比較対照が可能である。筆者はこの方法により、現行本文の上限を推定したことがある³⁾。朱譜を伴う配役書入本は、人形浄瑠璃文楽の伝承史を構想するに際して、極めて有効な資料である。

三味線の勘所・ツボをイロハに置き換えて記すという記譜法は、三代鶴沢友次郎（初代鶴沢清七。文政九・一八二六年没）の考案と伝えられ、大阪音楽大学音楽博物館には天明・寛政期の資料も残る。

配役書入本をみると、寛政四年の [151] 『菅原伝授手習鑑』 [053B] 『仮名手本忠臣蔵』などが古い例であるが、ひとつの層・まとまりとしてみると、文政・天保期以降のもの、と表現することができる。言い換えて朱譜を用いて伝承過程・変遷を探る場合、文政・天保期が最古となると考える——それ以前は比較対照すべき資料が残っていないのだから——。本文研究はさらに初演時までは遡り得るものの、三味線の旋律まで含めた義太夫節の音楽研究

の対象範囲の上限は、およそ二百年となる。

しかし直近二百年といながら、義太夫節の伝承過程に関する研究は、本文についても、また音楽についても漸く緒についたばかりである。配役書入本はその大きな基盤となる資料と考えている。

二、建つの上演演目の復活と配役書入本の効用

筆者は、配役書入本を考究することで、廃絶した演目・場面について復活・復旧できるだろう、と考えている。上演演目の復活の意義を述べるにあたり、上演方式をめぐる歴史について少し詳しく触れておきたい⁴⁾。

人形浄瑠璃興行の上演方式には、大きく分けて、「建て」と「見取り」という二つの方式があつた。「建て・立て たて」とは、こんにちでは「通しとおし」と呼ぶことが一般的であるが、元来長編である一つの浄瑠璃作品（『仮名手本忠臣蔵』なら『仮名手本忠臣蔵』の全編）を冒頭から上演するものである。一方の「見取り みどり」とは、複数の作品から選り取り見取りに、一場面ずつ取り集めて上演するものである。

「建て」「通し」であるかは、冒頭に「大序 だいじょ」が備わるか否かで機械的に判断することができる。番付の外題（げだい。作品名表記）の下に「大序より何段目迄」と書くものが、通し・立て・建ての判断基準となる。江戸時代以来、近代に至るまで——具体的には、一九二九（昭和四）年・大阪弁天座興行まで——、時代物の「建て」が興行の基本であつた。

「建て」という上演方式が廃れるのは、一九三〇（昭和五）年以後、大阪四ツ橋音楽座、松竹合名社（こんにちの松竹株式会社の前身）経営時代である。明治・大正期までは通しで伝承されながら、当該時期に次なる上演機会を保ち得なかつたいくつかの作品が、「建て」の演目から脱落することになった。

「建て」の演目の復活を目指したのは、松竹が手を引いたあとに文楽の活動を全面的に支えた、国立劇場（一九六六昭和四十一年開場）である。一九六七（昭和四十二年）第二回文楽公演『伊賀越道中双六』を初例として、松竹時代に欠落した「大序」を復活し、伝統的な「建て」の演目に復旧させることに努めた時期が、確かにあつた。

表1 国立劇場が「通し狂言」と謳う演目一覧

No.	作品名	年月	認定	備考
1	伊賀越道中双六	42・3	○	『伊賀越乗掛合羽』を補う余地あり
2	仮名手本忠臣蔵	42・12	○	
3	加々見山旧錦絵	43・10	×	『加々見山廓写本』を補う余地あり。 朱譜伝存
4	妹背山婦女庭訓	44・2	×	大序を欠く。朱譜伝存
5	本朝廿四孝	44・10	○	
6	ひらかな盛衰記	45・2	△	序切を欠く。朱譜伝存
7	義経千本桜	45・4大	○	
8	恋女房染分手綱	45・8大	×	第一、第三を欠く。朱譜伝存
9	源平布引滝	45・11	△	序切・二ノ口を欠く。
10	祇園祭礼信仰記	46・5	×	大序・序中、二段を欠く。朱譜伝存
11	碁太平記白石噺	46・5	×	大序を欠く。配役書入本だけの復活は不可能。
12	菅原伝授手習鑑	47・5	○	
13	伽羅先代萩	47・9	×	『伊達競阿国戯場』もしくは『粧水絹川堤』を補うほか、改作の大序以下数段の復活が必要。配役書入本だけの復活は不可能。
14	奥州安達原	48・2	○	
15	絵本大功記	49・4	○	
16	一谷嫩軍記	50・2	○	
17	神霊矢口渡	50・5	×	初段・二段を欠く。朱譜伝存
18	彦山権現誓助剣	50・9	○	
19	生写朝顔話	53・5	○	
20	国性爺合戦	55・2	○	
21	新うすゆき物語	55・9	×	大序を欠く。朱譜伝存
22	五天竺	56・9	×	大序を欠く。朱譜伝存
23	玉藻前臆袂	57・9	○	

浄瑠璃本（通し本）の配役書入本の効用

国立劇場は建てて上演する場合、「通し狂言」と特記する。上の「表1 国立劇場が「通し狂言」と謳う演目一覧」を参照されたい。No.2『仮名手本忠臣蔵』、No.15『絵本大功記』は松竹合名社時代にも「大序」から始まる建ての演目であり続けたが、その他の二十一作品は大小の場面について復活の手を加え、国立劇場が建ての演目として復旧させた演目の一覧である。ただし「通し狂言」という語自体が必ずしも伝統的な用語でなく、「大序」を備えない——伝統的な建ての基準に合致しない——演目をも、「通し狂言」と呼称している。そこで伝統的にみて、建てと呼び得るか否かを筆者なりに判断してみる。大序を備えた十四作品が、伝統的な基準にも合致した、建ての演目である（認定欄に○・△と記す）。大序を欠く九作品は、除外すべきである（認定欄に×と記す）。

No.11『碁太平記白石噺』、No.13『伽羅先代萩』以外の七作品について、配役書入本から朱譜を得ることが出来る。また建ての演目と認定できるもの、前代までの全段を継承できていない作品（No.6『ひらかな盛衰記』、No.9『源平布引滝』）も同様で、現行文楽での欠落をさらに補う余地がある。配役書入本の効用として筆者が最も強調したい点はこのことで、建ての演目を復活・復旧するにあたっての最大の資料となり得る点に価値がある。

なお大正期には表1のほかに、次の十作品も建ての演目として伝承されていた。①『鎌倉三代記』、②『木下蔭狭間合戦』、③『三日月太平記』（上演題「出世太平記」）、④『酒呑童子話』（上演題「大江山酒呑童子」）、⑤『太平記忠臣講釈』、⑥『日蓮聖人御法海』、⑦『八陳守護城』、⑧『花魁荅八総』（上演題「里見八犬伝」）、⑨『日吉丸稚桜』、⑩『双蝶蝶曲輪日記』。

⑧を除いた、九作品はいずれも「付け物」（幕物）の演目として、一部の段がこんにちの文楽に伝承されている。配役書入本は、当該十作品についても、ひと興行全体の朱譜をいくつか伝えている。

これらの点から気付かされるのは、現行の文楽は、たった百年前（一九二二大正元年—一九二五大正十四年）の伝承ですら完全な形では継承し得ていない、という事実である。また国立劇場の建ての演目の復活は、表1のNo.23を最後に途絶している。国立劇場の「建ての演目」復活事業が過去三十年間、一度

も実現していないのは、極めて残念なことである。

通し本の残る作品は六百三十点。配役書入本を作品毎に数えると、

近世二百三十点で、作品数八十五

近代百三十九点で、作品数四十

となる。近世期を朱譜の残り始める文政期以後で数え直しても、

文政期以降百六十点で、作品数五十三

となつて、この数値は、近世から近代に進む過程で、上演演目が漸次減少していたことを示している。

たださえ上演演目は減るのである。そこに大阪四ツ橋文楽座・松竹合名社時代に「見取り」上演方式が採用され、建ての演目の伝承機会が失われた。

その悪影響から、人形浄瑠璃文楽は今なお立ち直れてはいない。

せめて大正期の伝承までは完全に復旧してみようではないか。そのためには「見取り」を捨て、「建て」「通し」を上演方式の原則に据え直すことが第一歩である。二〇一一年、一度も「建て」を出さなかつた国立劇場・国立文楽劇場、そして人形浄瑠璃文楽の技芸員とこれに関わるすべてのひとたちへの提言である。

三、配役書入本の利用上の留意点

配役書入本の年次考証を通して気付いた点を述べておきたい。

(1) 誰が記したのか

第一の留意点は、誰が記したのか、である。多く朱譜(三味線譜)を伴うことから、三味線弾きがのちの手覚えのために記した、と考えられる。その三味線弾きの修行の階梯の中で、どういった時期に作成されるものかは、と朱譜の正確性・信頼度に関わる点であろう。

次に掲げる五例は、記譜者と推定される三味線弾きが、極めて初心者である事例である。

[069] 一八二七・文政十年十一月『祇園女御九重錦』 鶴沢竹松

[070] 一八二七・文政十年十一月『祇園女御九重錦』 鶴沢秀治郎

[153] 一八二八・文政十一年十月『菅原伝授手習鑑』 鶴沢勇治郎

[148] 一八六一・文久元年五月『神靈矢口渡』 鶴沢重太郎

[274] 一八八八・明治二十一年十二月『三日太平記』 鶴沢重子

いずれも初出座——番付にその名が初めてみえる——が、当該興行の次の興行である点に特徴がある。言い換えて、三味線弾きは番付に名が初めて記される以前に、実際上は既に初舞台そのものを済ませている場合がある、と知られたのである。

次の三例は記譜者ではないが、やはり次回興行の番付で初出する三味線弾きが、配役書入本の記録上、既に出演していたと考えられるもの。

[004] 一八三四天保五年三月『東鑑御狩卷』 卯之輔

[148] 一八三四天保五年五月『神靈矢口渡』 勝助

[034] 一八四一天保十二年八月『絵本大功記』 宇之松・小竹

三味線弾きの修行の階梯がよく判らないのだが、初舞台以前に、既に興行に参画する段階があり、そこで一定程度の成果の認められた者が、番付に記載されていく、という順序があるらしいことが、右の八例から推定される。

記譜者たちの三味線弾きとしての番付にみえる上での経歴が浅い——何しろ初出座以前なのだから——としても、初出座以前に修養の時期があつた(少なくとも三味線が弾けるようになるまでの)と考えられるのであるから、ただちにその正確性・信頼度を疑う必要はないと考える。

(2) 浄瑠璃本(抜き本)との関連について

朱譜を記した資料としては従来では、浄瑠璃本(抜き本)に記されたものが利用されてきた。しかるに「抜き本」(いわゆる稽古本)として刊行されるのは、基本的には「切場 ぎりば」(段の後半の頂点・クライマックス)がほとんどで、稀に「端場 はば」(段の前半の、導入部)の内、「立端場 たてはば」と呼ばれるものも著名なくつか、に限られる。すべての段について抜き本が刊行されたものは、『仮名手本忠臣蔵』一作品のみ。「抜き本」を渉猟する限りでは、建ての上演演目の復活は望み得ないと断言しておきたい。

前項に記すように、三味線弾きの修行の階梯において、初心の彼らの担う

段・場面は、抜き本の刊行されるような、著名な場面ではあり得ず、通し本にのみ記された、段冒頭の、ごく短い一部分、となる。配役書入本には端場の朱譜の詳細なものも多く、これらは、初心の三味線弾きたちにとって、次の上演機会に自分が担う可能性の高い「端場」を丹念に記録したものと、として了解することができるだろう。

また余程修行が進んで、「立端場」「切場」といった重要な段を担当することが射程にみえてきた場合には、文字も大きくて行間の広い「抜き本」に朱譜を詳細に記すこととなろうし、現に配役書入本でも、切場の朱譜が簡略な例も少なくない。

・端場を含む、全体については「通し本」
・立端場や切場など主要な段については「抜き本」
という資料の使い分けが行なわれていた、と考えられる。

従来、演目復活にあたっては、第一に抜き本の朱譜を探索・活用してきたが、今後は配役書入本を基盤に据え直し、朱譜資料全体の関連を捉えるところから始めるべきことを提唱したい。

(3) 段の前後を入れ替える例

『祇園女御九重錦』（上演題「卅三間堂棟由来」）の文政十年（一八二七）十一月十九日・兵庫常芝居興行には、[069]・[070]・[070]の次、の三点の配役書入本が残る。当該興行は[069]の〔備考〕に述べるように、「当該興行は、「大序より三段目まで」と謳うが、当該本に「式段目」の朱がないこと、および番付の人形役割から、四段目を二段目としたもの」と知られた。

番付における大夫の役場の表記は、ふるくは段数および口・中・切の区分を以て示されていたが、のちには「段名」を示すように変遷した。右の『祇園女御九重錦』は段数表記時代の番付であるので、人形役割から推定できたとはいえ、配役書入本で上演段の内容が明確になったという事例である。

以下に示す七作品は段名表記時代の事例であるので、番付の段名を読めば判るものであるが、右に同じく、一部の段の前後を入れ替えて上演した例。

『五天竺』（[093]）、『木下蔭狭間合戦』（[094]など）、『四天王寺伽藍鑑』（[111]

など）、『新うすゆき物語』（[137]）、『玉藻前曦袂』（[164]）、『八陳守護城』（[209]など）、『双蝶蝶曲輪日記』（[247]など）。

ただし時々事情（担当する大夫の上下関係など）によると思われるこれらの事例が近世期に存在することを根拠化して、「段の前後を入れ替えること」を一般法則化してはならない、と戒めておく。

国立劇場では、(3)頁・表1のNo.5『本朝廿四孝』を初例として、五段続の二段目と三段目の前後を入れ替え、昼の部に「一・三」、夜の部に「二・四」各段を並べる上演方式を案出した（物語の本来の流れや、前後関係・時間設定を混乱させる愚行である）。以後国立劇場では、近世期に前後を入れ替えた例のない、すなわち歴史的根拠を持たない上演方法をいくつかの作品にも応用するのであるが、これは日本芸術文化振興会（国立劇場の設置主体）の目的・事業内容として掲げる、「2. 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演」の、

伝統芸能の公開については（中略）、つとめて古典伝承のままの姿で、正しく維持・保存されるよう心がけて行っています。

との表明と、大きく矛盾すると指摘しておきたい。

なお配役書入本など、資料に基づく場合は「歴史的根拠がある」ので、段の前後を入れ替えても、可（資料の指示通りの変更ならば）。たとえば[097]天理図書館本に基づき建て・通しを復活するならば、文政十一年（一八二八）九月・大坂稲荷境内芝居『木下蔭狭間合戦』の古例に任せ、段の前後を入れ替えなければならない。段の前後を入れ替えず、順序通りの建て・通しとしたいならば、文政二年（一八一九）二月・大坂いなり境内、同作・[095]早稲田大学演劇博物館本を典拠に採用すれば良い。

繰り返しになるが、近世期に先例のないことは「歴史的根拠がない」から厳に行なってはならない。人形浄瑠璃文楽が近世以来の伝統演劇であることの矜持であろう、と考える。

まとめ

本稿では、浄瑠璃本（通し本。いわゆる丸本）の配役書入本の紹介を終えるにあたって、上演記録や古楽譜としての資料的価値（一節）、廃絶した建ての

上演演目の復活の基盤となるであろうこと(二節)を述べた。また資料として活用するに於いての留意点のいくつかを指摘した(三節)。

なお一冊の本に複数回を記録する場合、もともと古い年次記録で立項した上で、残余の記録については「備考」欄に示した。(29)頁「浄瑠璃本(通し本)の配役書入本の年月順総索引」では、「備考」欄中の記録も検索できるように並べているので、参照願いたい。

またこのたび配役書入本として紹介したものは、筆者が年次を考証し得たもの(推定を含む)に限定している。年次不明とせざるを得なかった資料四点(義太夫協会『生写朝顔話』、日本大学総合芸術情報センター『日本振袖始』、広島文教女子大学附属図書館『日本賢女鑑』、文楽協会『敵討稚物語』)については、なお傍証を求めていきたい。

上中下各編の凡例に、「なお宝暦年間を中心に初演太夫の役割を記した本が数多く残るが、本稿では省いた。また配役(太夫・三味線弾き)を記さない、朱譜のみを記した本についても原則として省いた。」と述べたように、整理の対象外とした資料がある。

太夫だけの配役であったとしても、初演番付が伝存しない例やそもそも当該資料でのみ興行の存在が知られた例などは特に立項したのであるが、その取捨には遺漏もあるうかと思われる。大方の御批正を仰ぎ、万全を図りたい。整理に漏れる資料や考証の誤りなど、ご教示ください。

日本芸術文化振興会の目的・事業内容の、「2. 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演」は、前に引用する文に続いて、

例えば、歌舞伎や文楽は、物語の展開を理解しやすいよう、筋を通した通し狂言の上演に努め、能楽は、能一番、狂言一番による番組を原則とし、初めての人にも鑑賞しやすいようにしています。また、優れた作品で上演が途絶えた演目を復活させるとともに、新作への取り組みを行い、演目の拡充に努めています。

大阪音楽大学音楽博物館・大阪市立中央図書館(因協会旧蔵本を含む)・国立劇場・国立文楽劇場・早稲田大学演劇博物館が、旧来の調査範囲だったかと

思う。五機関で二百二十四点。残余五十七機関百四十五点の配役書入本の所在を明らかにし、都合三百六十九点について年次考証を行なった。演目復活の資料整備を、半歩ほどは前進させ得たものかと自負するところである。

本稿は、平成二十三年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベースの作成と活用・公開に関する基礎的研究」(研究課題番号:22320054。研究代表者・神津武男)の研究成果の一部である。

注

(1) ①「浄瑠璃本(通し本)の配役書入本について(上)」「あ」「こ」(演劇博物館グローバルCOE紀要『演劇映像学2007』第三集、二〇〇八年三月所収)、②「浄瑠璃本(通し本)の配役書入本について(中)」「さ」「は」(同紀要『演劇映像学2010』第四集、二〇一〇年三月所収)、③「浄瑠璃本(通し本)の配役書入本について(下)」「ひ」「ら」(同『演劇映像学2010』第四集、二〇一〇年三月所収)。いずれも早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」の発行。

(2) 図書館・博物館・歴史民俗資料館・文書館など、資料の整理・公開を旨とする機関であれば、これほど放置することは考えられない。国費を投じられた機関として、恥ずかしいと思わねばならない。

(3) 拙著『浄瑠璃本史研究』(八木書店、二〇〇九年)の第四部「作品研究」第二章「本朝廿四孝」第三ノ切「勘助住家の段」参照のこと。現行の改訂本文の特徴が、[25]天保元年(一八三〇)十月・大坂いなり境内には見えず、[26]天保五年(一八三四)七月・大坂いなり境内の配役書入本に見えることから、改訂時期を推定した。(4) 拙稿「中西仁智雄コレクション浄瑠璃番付写真集」一付論・人形浄瑠璃文楽の現況と問題」(『近松研究所紀要』第十八号、園田学園女子大学近松研究所、二〇〇七年十二月所収)の、「四『番付写真集』を通過して判ること」「(一)「建て」と「見取り」もあわせて参照のこと。

(5) 近世期において「通し」は「建て」と同義であったが、「通し狂言」という語そのものが番付上に初めて用いられたのは、大序を備えない、昭和十八年(一九四三)二月『一谷嫩軍記』興行が初例である。

同例に照らせば、国立劇場・国立文楽劇場の語の用法に誤りはない。しかしこの用法——大序なしの上演を、「通し」と呼ぶこと——を認めるとすると、伝承の基準を昭和前期以後に求めることになり、独立行政法人化したとはいえ、何のための国家事業であるのか、疑問を禁じ得ない。人形浄瑠璃文楽の課題の第一は、伝承の基準を大正期以前と見定め、建てを興行の基本に据えることと筆者は信じる。

【上篇追加】

芦屋道満大内鑑 あしやのどうまんおおうちかがみ

※【001】の「年代」を、「宝暦九十年（一七五九―六〇） 江戸肥前座カ」と変更する。【051】の次『大塔宮曦鎧』（備考）参照。

また作品名の読みも、新出した宝暦期の通し本包紙の振り仮名によって、「あしやの…」と変更する。

糸桜本町育 いとざくらほんちようそだち

【001】の次

【年代】安永六年（一七七七）三月三日 江戸薩摩外記座

【所在】大阪府立中之島図書館（251-1240）

【記述】【第八 小石川】八十六丁表六行目「筆・富八」。

【朱譜】なし

【備考】初演興行。番付では三味線弾きの組み合わせが判らないので参照のため掲げた。

【001】の次の次

【年代】文化三・四年（一八〇六・七）頃 江戸カ

【所在】東京大学教養学部国文・漢文学部会（4142505黒木文庫）

【記述】本丁一丁表二行目「可迪・野松」（浅草のたん）、六丁裏六行目「織太・ツル野桑（五郎）」、十三丁裏二行目「出水・野喜（次郎）」、二十丁表一行目「文太・鶴左（市）」（第貳 屋形のたん）、二十六丁表六行目「式太・鶴弥（吉）」、卅二丁表一行目「掛ヶ合・野重（五郎）」（第三 中の町の段）、四十六丁表一行目「竹房・野喜（次郎）」（第四 糸屋のたん）、五十三丁裏三行目「竹祖・鶴紋」、六十七丁表一行目「遊湖斎・ワキ竹文（字）・野重（五郎）・ワキ鶴左（市）」（第五 道行妹背の組糸）、七十丁表一行目「出水・鶴左（市）」（第六 駒形のたん）、七十二丁表一行目「竹村・野喜（次郎）」（第七 行徳のたん）、八十二丁表一行目「頼母・鶴弥（吉）」（第八 小石川のたん）、八十六丁表六行目「素柳・竹祖・鶴紋」。

【朱譜】なし

【備考】新出の興行。「可迪太夫」は享和二年（一八〇二）五月江戸薩摩座初演『敵討操姿鏡』、『遊湖斎素柳』は文化四年（一八〇七）七月江戸結城座初演『女郎花縁助太刀』の出演者で、それぞれ江戸のいくつかの資料に名がみえる。右の配役は、江戸の劇団のものであることは確かと思うが、座を特定できない。

年次考証の詳細は、【279】『往昔模様亀山染』、【293】『蘭奢待新田系図』興行に同様。文化三年の江戸大薩摩座二興行（正月『花競名匂零』、三月『双蝶々曲輪日記』）、および文化四年『女郎花縁助太刀』の太夫・三味線弾きの顔ぶれに近い（太夫の「可迪」「織太」「出水」「文太」「式太」「竹祖」「頼母」、三味線の「野松」「鶴紋」は見えない）。記譜者未詳。

妹背山婦女庭訓 いもせやまおんなていきん

【001】の次の次

【年代】安永七年（一七七八）正月二日 江戸外記座

【所在】原道生氏（019）

【記述】【初段 大序】妹背老丁表一行目「達」、【初段 中】五丁裏六行目「志渡」、【初段 切】十丁裏六行目「久」、【初段 切】十六丁表七行目「岨」、【二段目 口】廿三丁表二行目「殿」（第貳 番付では「筆太夫」）、【二段目 中】廿七丁表四行目「内匠」、【二段目 切】三十四丁表三行目「島」、【三段目 切 かけ合】五十三丁表五行目「内匠・春」、【四段目 口】六十八丁表二行目「巻」、【四段目 口】七十一丁裏三行目「村」、【四段目 道行】七十六丁表一行目「春太夫・村太夫・友太夫」、【四段目 中】七十八丁裏一行目「筆」、【四段目 次】八十六丁表六行目「輝」（を白紙貼紙で消す）、【四段目 次】八十八丁表三行目「春」。

【朱譜】なし

【001】の次の次の次

【年代】文政七年（一八二四）三月吉日 江戸結城座カ

〔所在〕 あきる野市五日市郷土館（上田家文書：(14) 学芸-006）

〔記述〕 前見返しに「役割」を書き込む。「大序（口鳴太夫・喜三二）（中津太夫・徳治郎（口岡太夫・勝吉 春太夫・東造。一段目（口生駒太夫・徳治郎 中岡太夫・勝吉 々春太夫・東造 切宮戸太夫・勝治郎）（上段）、三段目（口岡太夫・勝吉 中絹太夫・芳治郎 切 氏太夫・勝治郎 むら太夫・勝造）（中段）、四段目（口絹太夫・芳治郎 切むら太夫・勝造。道行 生駒太夫・岡太夫・春太夫（東造・徳治郎。上使氏太夫・芳治郎 竹雀宮戸太夫・勝治郎）（下段）。

〔朱譜〕 なし

〔備考〕 後ろ見返しに墨書「口上甲紙・文政七年申三月吉日・鶴沢芳治郎・門弟此主半造」とある。顔触れが文政七年正月の江戸結城座に近似すること、喜三二は文政九年三月に熊造、徳治郎は文政8年正月に勘五郎へ改名することなどから、これは文政七年三月江戸結城座興行の配役を記したものと推定する。

〔031〕の次

〔年代〕 文久三年（一八六三）正月十一日 大坂いなり社内東小家

〔所在〕 A ガーストル氏

〔記述〕 蝦夷館 切 十九丁裏三行目「長枝太夫・九蔵」、【猿沢ノ池 口】廿三丁表一行目「糸太夫・団勝」（第弐）、【猿沢ノ池 奥】廿四丁表一行目「口・音か大夫・吉作」、【芝六住家 次】三十丁裏四行目「佐渡太夫・カハリ住太夫・鹿蔵・ツレ由次郎」、【芝六住家 切】三十四丁表三行目「弥太夫・新左衛門」、【芝六住家 切】四十丁表三行目「染太夫・広助」、【山】五十三丁表上「背山竹木々長門太夫・同弥太夫・団平・妹山豊竹咲太夫・竹本勢美太夫・勝右衛門」、【道行三輪のおだ巻】七十七丁表一行目墨書「筑前大夫・長枝大夫・和太夫・新左衛門・九造・仙七」。

〔朱譜〕 四ノ切まで朱譜がある。

いろは蔵三組盃

いろはぐらみつぐみさかずき

〔030〕の次

〔年代〕 文政六年（一八二三）十二月二十八日 大坂いなり宮社内

〔所在〕 同志社女子大学京田辺図書館（Z912.4-C9290 WA(0482029477)）

〔記述〕 【淀屋 口】三十三丁裏二行目「たか太夫・才治」、【淀屋 切】四十一丁裏四行目「竹本重太夫」、【新兵衛内 口】六十丁表二行目「湊太」、【新兵衛内 切】六十四丁裏六行目「まさ太夫」。

〔朱譜〕 なし

奥州安達原

おうしゅうあだちがはら

〔041〕の次

〔年代〕 安政三年（一八五六）五月吉日 大坂新築地清水町浜

〔所在〕 香川県立ミュージアム（近石秦秋資料・くらZ0888）

〔記述〕 【義家館 切】十六丁表四行目「当久太・源吉」、【善知鳥文治住家 おく】三十四丁裏二行目「むら太・吉弥」、【善知鳥文治住家 切】三十八丁裏六行目「弥太夫・仙八事新左門」、【謙杖切腹 口】五十丁裏七行目「久大夫・朔太郎」、【謙杖切腹 中】五十四丁裏五行目「当久太夫・源吉」、【謙杖切腹 切】五十八丁表五行目「湊太夫・勝右エ門」、【一つ家 切】八十一丁表七行目「田組・広助」。

〔朱譜〕 大序（〇四〇七）、序切（九〇七〇〜三三〇七）、二ノ切（廿七〇五〜四十三〇七）、三ノ切（五十五ウ五〜五十八オ四）、七十一ウ一〜七十二ウ五、八十一オ一〜九十三オ七に朱譜がある。五十八ウ〜六十九オには墨で朱譜を記す。

応神天皇八白幡

おうじんてんのうやつのはた

〔045〕の次

〔年代〕 享保十九年（一七三四）二月朔日 大坂竹本座初演興行

〔所在〕 関東短期大学（0174）

〔記述〕 【大序】白老丁表一行目「義」、【初段】六丁裏六行目・三重右「和泉」、十丁表六行目「喜」、【式段】廿三丁表一行目「式」（第弐）、廿四丁裏一行目（標題「大和京大平地祭」下）「義」、廿八丁表六行目・三重右「文」、【道行】四十

一丁表一行目「和泉・喜」(第三 道行梅追風)、【三段】四十三丁表一行目「喜」、四十七丁表一行目・三重右「義」、【四段】六十四丁表一行目「式」(第四、六十七丁裏一行目「喜」、七十七丁裏二行目「義」、【五段】八十九丁表二行目「文」(第五)。

〔朱譜〕なし

〔備考〕原番付が残らないので参考のため掲げる。なお【045】同作(長友千代治氏)と相違する点もある。初演興行途中で変更があったものか。ほかに宝暦後半・明和頃、竹本座系統と推定する、次の書き込みがある。

白壺丁表一行目「岬ミサキ」、六丁裏六行目上「ヲト」、十丁表六行目「タケ」、十六丁裏六行目「ツナ」(「奥に」に歌括弧、「ヲクリ」と墨書、廿三丁表一行目「タケ」(第二)、廿八丁表六行目上「ヒチ」、三十二丁裏五行目「ユリ」、四十三丁表一行目「キヨ」、四十七丁表一行目「マサ」、六十四丁表一行目「ヨリ」(第四)、六十七丁裏一行目「マキ」、七十丁裏六行目「ユミ」(「御殿へ」に歌括弧、「ヲクリ」を墨書)。

ミサキ・ヲト・ツナ・キヨ・マサ・ヲリ・マキは、宝暦二年六月吉日付・二代竹本政太夫の門人連名にみえる(タケ・ヒチ(ハシチ)・ユリ・ユミは、定かでない)。右の門人連名にみえる太夫は、宝暦後半から出座している。仮に、宝暦後半・明和期の上演と推定し、後考に俟ちたい。

近江源氏先陣館

おうみげんじせんじんやかた

【046】の次

〔年代〕安政元年(一八五四)四月吉日 大坂道頓堀竹田芝居

〔所在〕香川県立ミュージアム(近石春秋資料・くららZ-0892)

〔記述〕【東大寺 跡】十二丁表二行目「鳴勢・八造」(墨)、【より家やかた 口】十五丁裏一行目「長子大夫・団八」(墨)(第三)、【より家やかた 中】十八丁裏五行目「音の・新治」(墨)、【より家やかた 切】廿二丁裏六行目「千賀・泰(次郎)」、【高宮茶店 口】三十四丁表一行目「鳴勢大夫」、【四斗兵へ住家 口】四十丁裏一行目「由良・梅(次郎)」、【四斗兵へ住家 切】四十五丁裏七行目「中太夫・文作」、【盛綱陣家 口】六十六丁表一行目「越大夫・

七兵衛」(第八)、【盛綱陣家 切】七十丁表七行目「長登・清七」。

〔朱譜〕廿二ウ7(三十一ウ7、三十八ウ7)五十五ノ七オ2、七十オ7(七十五オ2、八十二オ3)八十三オ7に朱譜がある。

〔備考〕次に掲げるのは初演の太夫の役割。墨書。壺丁表二行目「木々」、六丁裏二行目「染」(第三)、十二丁表一行目「鐘」、十五丁裏一行目「弥」(第三)、十八丁裏五行目「組」、廿二丁裏六行目「咲」、三十二丁表一行目「三根・和」(道行)、三十四丁表二行目「彦」、四十丁裏二行目「木々」、四十六丁表一行目「染」、五十八丁表二行目「組」(第七)、六十六丁表二行目「三根」(第八)、七十丁表七行目「鐘」、八十三丁裏二行目「咲」、八十七丁表二行目「綱」。

大塔宮囃鐘

おおとうのみやあさひのよろい

【051】の次

〔年代〕宝暦九十年(一七五九一六〇) 江戸肥前座カ

〔所在〕関西大学図書館(9117*TT*29)

〔記述〕囃二十三丁表一行目「千賀」(第二)、卅二丁表七行目「文字」、卅三丁表一行目「文字・佐野」(着到馬ぞろへ)、卅五丁裏一行目「佐野」、四十三丁表一行目「房」(第三)、四十六丁表五行目「岡」、大三壺丁表一行目「歌門」(大塔宮 若宮紅梅の短冊)、大三五丁裏一行目「千賀」(「とこそ」の前に歌括弧追加)、七十丁裏四行目「文字」、七十七丁裏七行目「岡」(「く出て行」の前に歌括弧追加)。

〔朱譜〕なし

〔備考〕新出の興行。当該本の内題は「太平記囃鐘」(上演題は「大塔宮囃鐘」の可能性もある。未詳)。年次考証の詳細は、【253】『北条時頼記』、【287】『由良湊千軒長者』興行に同様。宝暦八年正月の肥前掾没後(文字太夫が同座の太夫となる)、宝暦十一年七月『竹の春』以前(歌門太夫が三代新太夫を襲名)と考証する。ただし京都竹本座の千賀太夫は、宝暦八年、宝暦十一年に京都での出演が確認されるので、これを除外した、宝暦九十年と限定される。

なお本稿【001】『芦屋道満大内鑑』の〔年代〕を、右の考証理由に同様とみて、「宝暦九十年(一七五九一六〇) 江戸肥前座カ」と変更する。

※現 [052] (東京女子大学図書館・B911.70-005) → [052A] と改める。番付重複のため

加々見山廓写本 かがみやまさこのききがき

※現 [052] (大阪府立中之島図書館・251-0482) → [052B] と改める。番付重複のため

[052B] の次

〔年代〕 安政六年(一八五九) 三月三日 大坂稲荷社内東芝居

〔所在〕 大東急記念文庫 (4631-6155)

〔記述〕 【饗心】 十五丁表六行目「喜志大夫・大次郎」、【多賀館 切】 二十丁表二行目「佐賀太夫・三八」、【多賀館 切】 三十一丁裏二行目「多満太夫・九造」、【筑摩川 跡】 三十六丁裏一行目「喜志太夫・三蔵」、【花若切腹 中】 四十三丁表一行目「実太夫・重太郎」(五冊目)、【花若切腹 次】 四十六丁表二行目「氏太夫・九造」、【花若切腹 切】 四十九丁表四行目「春太夫・吉弥」。

〔朱譜〕 「式冊目」(七ウ4) ～ 「五冊目」(五十四ウ7) に朱譜がある。

〔備考〕 上演題は「加々見山旧錦絵」。

※現 [053] (早稲田大学演劇博物館・10-2398) → [053A] と改める。番付重複のため

仮名手本忠臣蔵 かなでほんちゅうしんぐら

※現 [053] (早稲田大学演劇博物館・10-0101) → [053B] と改める。番付重複のため

釜淵双級巴 かまがふちふたつどもえ

[059] の次

〔年代〕 元文二年(一七三七) 七月二十一日 大坂豊竹座

〔所在〕 日本民謡協会(町田資料768.5-10-A-013)

〔記述〕 一丁表一行目「湊」、十丁裏一行目三重の右「駒」、廿六丁表一行目「和佐」(中之巻)、卅七丁表五行目三重の右「太夫」、釜道一丁表一行目「太夫・要」(道行街の手向草)、釜道四丁裏六行目三重の右「カナメ」。

〔朱譜〕 なし

〔備考〕 初演興行であるが、番付がなく役割が不明であるので参照のため掲げた。

鎌倉三代記 かまくらさんだいぎ

[059] の次の次

〔年代〕 明治三十一年(一八九八) 九月吉日 大阪御霊文楽座

〔所在〕 大阪音楽大学音楽博物館 (0257-1812)

〔記述〕 【北条陣処入墨 口】 五十二丁表一行目「叶太夫・鶴五郎」、【北条陣処入墨 奥】 五十五丁表一行目「源太夫・花助」。

〔朱譜〕 十八ウ十九オ、五十二オ一～五十五オ一に朱譜がある。

〔備考〕 「豊沢大八所持」(墨書。表紙)。「四世鶴沢叶所持」(墨書。初オ)。

ほかに大正三年(一九一四) 正月二日、大阪御霊文楽座の配役も記す。

【和田兵衛秀盛屋敷 中】 十八丁裏貼紙「越貴大夫・玉勝・卯三郎・両日かわり」(第三)、【和田兵衛秀盛屋敷 次】 十九丁裏六行目「谷太夫・玉助・歌助・両日かわり」。

紙子仕立両面鑑 かみこじたりようめんかがみ

[059] の次の次の次

〔年代〕 明和五年(一七六八) 十二月二十一日 大坂北堀江市ノ側芝居

〔所在〕 国立国会図書館 (238-140)

〔記述〕 紙子老丁表二行目「生駒」(上之巻大手筋菊屋の段)、八丁裏四行目「八重」(新清水勘当の段)、十八丁裏四行目「鏡」、廿四丁表一行目「入」(中之巻東堀堀止の段)、廿八丁表六行目「辰」(本町大文字屋の段)、三十一丁裏一行目「此」、四十一丁裏一行目「光」(下之巻楠葉親里の段)、四十八丁裏二行目「鏡」、

五十六丁裏五行目「杣」(枚方堤の段、五十八丁表一行目「時・入」(道行涙の淀川)、六十丁表一行目「時・入」(長柄晒場の段)。

〔朱譜〕なし

〔備考〕初演興行。番付未見であるが、通し本(七行本)包紙の太夫連名に一致するので初演の配役と推定する。参考のため掲げる。

〔059〕の次の次の次

〔年代〕明和五年(一七六八)十二月二十一日 大坂北堀江市ノ側芝居

〔所在〕人形浄瑠璃因協会(綱造-0596)

〔記述〕紙子八丁裏四行目「八重」(新清水勘当の段、十八丁裏四行目「入太」、三十一丁裏一行目「此」、四十一丁裏一行目「登」(下之巻 楠葉親里の段、四十八丁裏二行目「鐘」。

〔朱譜〕三十一ウ1～三十九オ7に朱譜がある。

〔備考〕初演興行。考証内容は前項備考参照。朱譜は後年のもの。

祇園祭礼信仰記

ぎおんさいれいしんこうき

〔063〕の次

〔年代〕宝暦七年(一七五七)十二月五日 大坂豊竹座

〔所在〕国立国会図書館(238-166)

〔記述〕【初段 大序】祇老丁表二行目「若太」、【初段 中】七丁表三行目「諏訪」、【初段 切口】十三丁表六行目「伊(豆)」、【初段 切奥】十八丁表一行目「此」(墨)、「此・亀二(郎)」、【二段目 口】廿六丁表二行目「伊勢」(第二)、【二段目 切口】三十五丁表五行目「十七」、【二段目 切奥】四十丁表二行目「鐘」、【三段目 跡】五十丁裏二行目「伊(豆)」、【三段目 中】五十五丁裏四行目「駒」、【三段目 切口】五十九丁表三行目「鐘」、【三段目 切奥】六十六丁裏六行目「若」(墨)・(朱書「筑前」を抹消)、【四段目 口】七十八丁裏二行目「此」(第四)、【四段目 切口】八十五丁裏五行目「十七」、【四段目 切奥】九十四丁表五行目「駒・名八(郎)」。

〔朱譜〕四ノ切に口三味線風の朱筆の書き込みがある。

〔備考〕初演興行。初段ノ切奥、四段目ノ切奥の三味線弾きが判るので参照のため掲げた。

〔067〕の次

〔年代〕明治三十五年(一九〇二)一月吉日 大阪御霊文楽座

〔所在〕大阪音楽大学音楽博物館(0232-1807)

〔記述〕【鳶田 口】五十丁裏一行目「小富太夫・勝太郎」、【鳶田 奥】五十五丁裏四行目「文字太夫・吉弥」、【天下茶屋 中】五十九丁表三行目「文太夫・鶴太郎」。

〔朱譜〕五十九オ3～六十六ウ6、九十一ウ6～九十九ウ7に朱譜がある。

〔備考〕「二代目鶴沢鶴五郎」(前表紙、朱書)。

八十五丁裏四行目「十七」は初演興行「四段目 切口」の配役。

〔067〕の次の次

〔年代〕明治三十五年(一九〇二)一月吉日 大阪御霊文楽座

〔所在〕大阪音楽大学音楽博物館(0232-1808)

〔記述〕【天下茶屋 中】五十九丁表四行目「文太夫・小生」(墨)。

〔朱譜〕祇九ウ3～十三オ6、十七ウ7～廿二ウ、三十五オ5～三十五ウ1、四十八ウ1～五十ウ、五十九オ3～(五十九オ5～六十一オ5は空白)～九十一ウ6に朱譜がある。八十一丁袋に挿入一葉。

〔備考〕前見返しに「御霊文楽座にて・明治二十八年一月二日初日全月廿三日迄打・二代目鶴沢鶴五郎」と墨書、「二世鶴五郎改・四世鶴太郎改・四世鶴沢叶」と朱書、「四世叶より二世清八となりし也」と万年筆書とある。

ほかに明治四十一年(一九〇八)一月吉日、大阪御霊文楽座の配役も記す。

【浮世風呂 口】七十八丁裏一行目標題下「常子大夫・吉兵改吉作」(第四)、【浮世風呂 奥】八十一丁裏七行目「時大夫・小生」。

また上演未詳ながら、祇四十八丁裏一行目標題(第三道行憂蓑笠)上に「五代目野沢吉兵衛師より習之」とある。

祇園女御九重錦 ぎおんによばんこのえにしき

[070] の次

〔年代〕 文政十年（一八二七）十一月十九日 兵庫常芝居

〔所在〕 帝京大学メディアライブラリーセンター（浄瑠璃 丸三）

〔記述〕 【初だん】 九重壺丁表一行目「苦・秀（次郎）」、【初だん】 壺丁裏七行目「元・百」、【初だん 大序】 三丁表一行目「桐」、【初だん 大序】 七丁裏五行目「佐代」、【初だん 口】 九丁裏五行目「久」、【初だん 切】 十二丁裏三行目「綾」、【初だん 跡】 十九丁裏四行目「久」、【三段目 口】 四十五丁表一行目「元」（第三）、【三段目 おく】 四十七丁裏五行目「頼」、【三段目 中】 四十九丁裏五行目「綾」、【三段目 切】 五十九丁表四行目「巴」、【式段目 口】 七十二丁裏一行目「時」（人を）に歌括弧、【式段目 中】 七十八丁裏六行目「久太夫・忠治良」、【式段目 切】 八十八丁表四行目「若太夫・弥七」。

〔朱譜〕 なし。

〔備考〕 墨印「豊竹森太夫」（前見返し）。[069] 備考参照。

軍法富士見西行 ぐんぼうふじみさいぎょう

[072] の次

〔年代〕 安永二年（一七七三）冬 江戸カ

〔所在〕 延岡市内藤記念館（安藤家文書）

〔記述〕 七丁裏七行目「吟・喜」、十二丁表六行目「七・利」、十五丁表二行目「時・仲」、【二】 十五丁裏一行目「鐘・富八」（第二）、卅四丁表四行目「時・仲」、卅九丁裏二行目「此・重」、四十九丁表一行目「入・仲」（第三）、五十五丁表一行目「時・吟・仲」（道行恋角文字）、五十六丁裏七行目「麓・重」、六十二丁裏七行目「鐘・富」、七十三丁表一行目「村・喜」、八十丁表一行目「入・利」、八十四丁表一行目「麓・重」、九十二丁表一行目「鐘・時・富八」（第五源平花合戦）。

〔朱譜〕 なし

〔備考〕 新出の興行。太夫の顔ぶれは安永頃の大坂の二代豊竹此太夫の一

座、三味線弾きは江戸の名跡と思われる。鐘太夫は安永二年頃、江戸に下る。此太夫・麓太夫らに江戸下りの確証が得られないが、安永二年八月『呼子鳥小栗実記』初演興行（北堀江市ノ側）と、次回十二月『けいせい恋飛脚』初演興行（曾根崎新地）との間に出演記録がないこと、また劇場が移転することなどは傍証となるうか。此太夫には従来、明和二年の江戸下りが知られているが、当該時期では七・時・村が揃わない。後考を俟ちたい。

※現 [073]（因協会・編造0600） → [073A] と改める。番号重複のため

契情小倉の色紙 けいせいおぐらのしきし

※現 [073]（東京都立中央図書館・加賀5845） → [073B] と改める。番号重複のため

粧水絹川堤 けわいみずきぬがわつつみ

[077] の次

〔年代〕 明和五年（一七六八）七月十五月初日 大坂阿弥陀池門前

〔所在〕 香川県立ミュージアム（近石春秋資料・くらZ-0903）

〔記述〕 絹川壺丁表二行目「熊」（島原の段、八丁表一行目「桐」（清閑寺の段）、二十一丁表一行目「七太夫」（下の巻 絹川村の段、三十六丁表一行目「左戸太夫」（垣生村の段、四十三丁表六行目「岡」）。

〔備考〕 初演興行の配役と推定される。全体に文字譜の書き込みがある。

源平布引滝 げんぺいぬのびきのたき

[083] の次

〔年代〕 明治二十四年（一八九八）六月十九日 大阪御霊文楽座

〔所在〕 兵庫県立歴史博物館（淡路源之丞 00731）

〔記述〕 【粟津】 廿三丁裏一行目「鶴尾太夫・鶴勇・叶松」（墨書）、【粟津】

廿五丁裏五行目「品尾・安二郎」。

〔朱譜〕 廿三ウ3〜廿六ウ7に朱譜がある。

〔備考〕朱書「御霊文楽座に於テ・明治二十四年・十月吉日」(前見返し)。
墨書「大操人形座本淡路源之丞」(前見返し貼紙)はのちの所蔵者。

1083の次の次

〔年代〕明治三十一年(一八九八)六月十九日 大阪御霊文楽座

〔所在〕大阪音楽大学音楽博物館(0239-184)

〔記述〕【堅田の里百性九郎助住家 次】五十三丁表六行目「七五三太夫・寛二郎」、【堅田の里百性九郎助住家 切】六十一丁表一行目「呂太夫・勝鳳」。

〔朱譜〕壹オ〜廿三オ7、廿九ウ5〜三十八オ3、四十二ウに貼紙「二段目イシヨウ付メリヤス」、五十オ3〜六十一オ1に朱譜がある。

〔備考〕前見返しに「御霊文楽座にて・明治三十一年六月十九日初日にて七月・十五日迄廿六日間打」「二世鶴沢清八」「四世鶴沢叶」と墨書がある。

ほかに明治三十五年(一九〇二)九月十七日、大阪御霊文楽座の配役も記す。

【木曾先生館 中】廿九丁裏五行目「登瀬太夫・勝太郎」、【木曾先生館 次】三十三丁表五行目「津ばめ太夫・綱造」。

国性爺合戦 こくせんやかっせん

※ 1089の年代を「明治二十年(一八八七)二月四日」と訂正する。

五天竺 ごてんじく

1091の次

〔年代〕嘉永元年(一八四八)四月 大坂西横堀清水町浜カ

〔所在〕香川県立ミュージアム(近石春秋資料・くらZ-1083)

〔記述〕【怪石】五天竺壹丁表二行目「竹本小卷太夫・豊沢広八」(怪石の段)、【水簾洞】四丁裏一行目「市太夫・門造」、【桃園】十壹丁裏七行目「竹本二見太夫・豊沢広八」(桃園の段)、【※段名不明】廿三丁表一行目「竹本当久

太夫・豊沢仙八」、【地獄く】三十式丁表四行目「豊竹若サ太夫・鶴沢清造」(地獄の段)、【※段名不明】四十丁表二行目「若太夫・団平」、【檀特山】五

十一丁表一行目「豊竹諏訪大夫・豊沢門造」(檀特山の段)、【林丹住家】五十

二丁裏五行目「淀(浜を上書き)太夫・菊松」(林丹子住家の段)、五十六丁表六行目「津島太夫・重造」、【太祖御てん】六十四丁裏一行目「豊竹若サ太夫・鶴沢清造」(太祖御殿の段)、【※段名不明】六十六丁表五行目「竹本辰太夫・豊沢広八」(入参菓の段)、【釜いり】六十八丁裏二行目「竹本二見太夫・豊沢広八」(釜煎の段)、【二つ家】七十丁表二行目「竹本千賀太夫・つる沢菊松」(二つ家の段)、【一つ家】七十式丁裏七行目「豊竹若太夫・豊沢団平」、【長者館】九十丁表五行目「竹本当久太夫・鶴沢清造」(須達長者館の段)、【長者館】九十四丁表三行目「竹本綱太夫・鶴沢伝吉」。

〔朱譜〕壹オ〜六オ7、十壹ウ7〜十六オ1、廿三オ1〜廿五ウ7、三十式オ4〜四十七ノ五十オ7、五十一オ1〜五十五ウ、六十四ウ1〜七十九オ、八十式オ1〜八十四ウ7、八十九オ4〜九十八オに朱がある。「一つ家」後半(七十式ウ7〜八十一ウ)に貼紙・本文改訂あり。

〔備考〕新出の興行。朱書「嘉永元歳申四月・清水町浜於文楽芝居・相勤申候・大当りくくく」「清六門弟・鶴沢清造」(前見返し)。当該劇団は六月兵庫明石芝居で、同作を引き続き上演した。配役【】に示す段名は、六月明石の番付から援用した。

木下陰狭間合戦 このしたかげはざまがっせん

1091の次

〔年代〕天保五年(一八三四)二月十三日 大坂いなり社内

〔所在〕神津

〔記述〕【芥川】壹丁表一行目「竹本卷大夫・鶴沢卯之助・鶴沢徳治郎・鶴沢金造」(発端壹之巻)、壹丁裏七行目「爰から鶴吉」、二丁裏五行目「爰迄・竹本木々太夫・竹沢鶴吉・八木大夫・虎吉・東吉・毎日かはり」、【鮎くみ】三丁裏六行目「しまい四日程かたつた・竹本成駒大夫事病氣・竹本為大夫かはり役・かわり役東吉・新三郎」、五丁表三行目「竹本志賀大夫・鶴沢小四郎」、六丁目五行目「由良大夫・八十松・かわり役新三郎」、【道三館 口】七丁裏六行目「竹本島大夫・つる富三郎」(三之巻)、【道三館 切】九丁裏一行目「竹三根・竹辰」、【道三館 跡】十四丁裏二行目「八木大夫・善四郎」、

【矢はき】十五丁表一行目「むら大夫・仙左衛門・かわり役・由良大夫・八十松」(四之巻)、【来作住家】口「十八丁裏七行目」竹本錦大夫・鶴沢富三郎・ツレビキ新太郎」(五之巻)、【来作住家】中「二十二丁表七行目」竹本谷大夫・竹百太郎、【来作住家】切「廿七丁表三行目」長門大夫・勝右衛門・メリヤス大勢、【熱田】口「三十七丁表二行目」由良大夫・八十松・爰はなし」(六之巻)、【熱田】口「四十四丁表一行目」由良・八十松、【熱田】おく「四十四丁表五行目」巴勢・仲造、【官兵へ砦】口「四十五丁裏一行目」三根大夫・辰造」(七之巻)、【官兵へ砦】切「四十八丁表六行目」むら・仙左衛門、【大門口】五十九丁裏七行目「島太夫・富三郎」、【壬生村】口「六十二丁裏六行目」谷大夫・百太郎、【壬生村】切「六十五丁裏五行目」住大夫・兵吉、七十七丁表一行目「爰なし」(十之巻)、【義輝やかた】口「七十九丁表四行目」哥・さと大夫・三味線・八十松・宇之助・三根・百太郎、【義輝やかた】中「八十一丁裏二行目」長門・勝右衛門。哥・錦大夫・辰造・八十松・中程・さと大夫に成・後成駒大夫、【義輝やかた】次「八十六丁裏七行目」錦・小四郎、【義輝やかた】切「八十七丁表一行目」巴勢・仲造、【義輝やかた】跡「九十八丁裏四行目」為大夫・鶴二郎」。

【朱譜】なし

【備考】表紙に墨書「鶴沢善太郎」、奥付に「此本何方へ参り候へ共・信濃橋さのや善太郎方迄・早々御戻し」と墨書がある。記譜者は出演者でもある善太郎。

【103】の次

【年代】明治七年(一八七四)三月吉日 大阪道頓堀竹田芝居

【所在】大阪音楽大学音楽博物館(0240-1815)

【記述】【奥御殿】切「八十七丁裏」織大夫 綱大夫に成」「仙糸 広作に成・六世広助に成松屋町なり・道頓堀竹田芝居にて勤メル」。

【朱譜】「五之巻」(十九オに貼紙、十九オ～二十三オ3)、「六之巻」後半(四十オ1)・「七之巻」(四十五ウ2～五十九ウ6)、「十之巻」後半(八十七ウ1～九十八ウ4)に朱譜がある。

【備考】八十七丁裏上に「駒大夫場也・十冊目也」と朱書き。終丁裏に「御殿は駒大夫場也」「明治七年三月下旬・十冊目朱入は・道頓堀竹田之芝居にて・御殿の段・織大夫後に綱大夫に成ル・仙糸後に広作と成又六世松屋町とも云豊沢広助と成」と朱書きがある。ほかに、次の三興行の配役も記す。

①明治三十年(一八九七)一月二日 大阪御霊文楽座

【犀ヶ崖来作隠れ家】口「十八丁裏七行目」津葉メ・鶴五郎」(五之巻)、【犀ヶ崖来作隠れ家】中「二十三丁表五行目」中 叶太夫・竹三郎、【犀ヶ崖来作隠れ家】切「廿七丁表三行目」切 谷太夫・勝鳳、【熱田神社鳥居前】口「四十丁表一行目」熱田ノ段 口 呂島・花勇、【熱田神社鳥居前】奥「四十丁裏二行目」奥 源太夫・竹三郎、【竹中官兵衛砦】中「四十五丁裏一行目」砦ノ段 中 七五三太夫・寛治郎、【竹中官兵衛砦】切「四十八丁表六行目」呂太夫・叶」。

前見返しに「御霊文楽座にて・明治卅年一月二日初日にて全月十二日ヨリ二月八日迄皇太后崩御・ニ付休日二月九日ヨリ三月十二日迄四十二日間打」と墨書、「二代目鶴沢鶴五郎」と朱書がある。

②明治三十四年(一九〇二)五月吉日 大阪御霊文楽座

【熱田社前】奥「四十丁裏二行目の左」高尾太夫・小生」。

③明治三十八年(一九〇五)四月吉日 大阪御霊文楽座

【竹中官兵衛砦】中「四十五丁裏一行目その左」南部大夫・鶴太郎、【竹中官兵衛砦】切「四十八丁表六行目その左」大隅大夫・清六」。

【104】の次

【年代】明治十八年(一八八五)二月二十日 大阪御霊文楽座

【所在】帝京大学メディアライブラリーセンター(浄瑠璃 丸五)

【記述】【斎藤道三館】切「十二丁表一行目」氏太夫・作次良、【靈割】口「十五丁表一行目下」是より・日吉丸・靈割ニ・相成候」「競太夫・宝二郎」、【矢矧橋】奥「十六丁裏五行目」春栄太夫・和三郎、【犀ヶ崖来作住家】中「十九丁表に貼紙」額太夫・広七、【犀ヶ崖来作住家】次「二十二丁表七行目」春戸太

夫・小弥七、【犀が崖来作住家 切】二十七丁表二行目「長尾・綱造」、【熱田 奥】四十丁裏三行目「南部大夫・勝市」、【竹中官兵衛砦 口】四十五丁裏一行目「路太夫・庄次郎」(七之卷)、【竹中官兵衛砦 切】四十八丁表六行目「越路太夫・吉兵衛」、【壬生村 中】六十二丁裏七行目「多門太夫・花助」(九之卷)、【壬生村 切】六十五丁裏五行目「弥太夫・大輔」、【壬生村 切】六十六丁裏三行目「弥太夫・大助」、【足利館】七十九丁表四行目「竹本谷太夫・つ沢庄二郎」、【勅使饗応】八十四丁表三行目「呂・津・広助」、【奥御殿 切】八十七丁裏一行目「時・叶」。

【朱譜】「發端卷之卷」(木下巻オ3〜三ウ6)、「貳之卷」(六ウ5〜七ウ4)、「三之卷」(八オに貼紙(本文・朱)、八ウ2〜十五オ1)、「四之卷」(十五ウ2〜十八ウ7)、「五之卷」(十九オに貼紙(本文・朱)、十九ウ5〜三十二ウ7、三十三オに貼紙(本文・朱)、三十三オ2〜卅四ノ六ウ7)、「六之卷」(三十九ウ上、四十オ1〜四十一袋中に挿入二葉(本文のみ)〜四十一ウ6、四十三オ3)、「七之卷」(四十五ウ1〜五十九ウ6)、「九之卷」(六十二ウ7〜七十六ウ6、七十九オ4〜八十ウに貼紙(本文・朱)〜百ウ4)に朱譜がある。

【備考】後ろ表紙に朱書「明治十八年一月吉日・木下蔭狭間合戦・野沢吉吾」とある。記譜者は出演者でもある吉吾。

【中篇追加】

時代世話女節用 じだいせわおんなせつよう

【二〇】の次

【年代】明和六年(一七六九)七月十九日 江戸肥前座初演興行

【所在】関東短期大学(551)

【記述】時代一丁表三行目「橋」(墨書(オ2「第壹 京都のだん」、十四丁裏三行目「久・東蔵」(ウ2「第三 烏丸屋敷段」、十七丁表二行目「筆・喜作」、二十七丁表六行目「音・五八」(オ5「第四 広沢のだん」、四十一丁表二行目「折・トミ(蔵)」(オ1「第五 松原のだん」、四十四丁表一行目「錦・喜作」、五十二丁表二行目「折・トミ(蔵)」(オ2「第六 谷中のだん」、五十六丁表三行目「住・五八」、六十六丁裏二行目「絹・左善」(オ1「第七 箕輪のだん」、七十三丁裏二行目「久・東治郎」(ウ1「第八 千住旅宿段」、七十九丁表二行目「錦・五八」、八十六丁裏二行目「住・左善」(ウ1「第九 小塚原の段」)。

【朱譜】なし

【備考】初演興行と推定するが、番付が残らないので、参照のため掲げる。

太夫は、翌明和七年の外記座(正月「神靈矢口渡」、八月「けいせい扇富士」・肥前座(四月「往昔模様亀山染」、八月「源氏大草紙」)の顔ぶれに近い。また三味線は、翌々年八年正月肥前座「弓勢智勇湊」にみえる(いずれも通し本・七行本の役割に拠る)。初演時の配役とみて矛盾はない。

神靈矢口渡 しんれいやぐちのわたし

【147】の次

【年代】文政二年(一八一九)八月二日 大坂いなり境内

【所在】関東短期大学(550)

【記述】【初段 大序】矢口壱丁表一行目「桑・力(松)」、【初段 大序】三丁裏二行目「出水・松(次郎)」、【初段 口】五丁裏六行目「吾・亀(之介)」、【初段 中】十一丁表七行目「富・由(松)」(由松は次回九月興行に出演)、【初段 切】十三丁表六行目「むら・喜代(七)」、【武段目 口】廿二丁表二行目「梶・八重(造)」(第二)、【武段目 おく】廿三丁裏六行目「染・勇(造)」。

【式段目 中】廿六丁裏六行目「富・豊（吉）」、【式段目 切】廿九丁裏三行目「重・浜（右衛門）」、【三段目 口】四十丁表一行目「吾・豊（吉）」（第三）、【三段目 おく】四十八丁表四行目「音・八重造」、【三段目 中】五十丁裏四行目「中・文（駄）」、【四段目 切】船頭ノ三丁裏二行目「中・広（助）」。
〔朱譜〕 十三才6〜廿一才2、五十ウ4〜六十七ウ7、矢口船頭ノ三ウ2〜十三才7までに朱譜がある。

〔備考〕 墨書「鶴沢豊吉」（終丁裏）。記譜者は、出演者でもある豊吉か。
〔147〕は「四段目切」を番付にみえない咲太夫とするが、右では番付に同じく中太夫とする。

関取千両幟 せきとりせんりょうのぼり

〔162〕の次

〔年代〕 安永四・五年（二七七五・六）頃 江戸薩摩外記座カ

〔所在〕 香川県立ミュージアム（近石泰秋資料・くら2-0549）『花軍寿永春・関取千両幟』

〔記述〕 三十六丁表三行目「佐賀」、三十九丁表二行目「ハリマ・喜治（郎）」、四十六丁裏三行目「梅・トミ蔵」（第二）、四十七丁裏四行目「伊勢・富八」、五十五丁表五行目「折・利八」（第三）、五十五丁裏七行目「絹・徳治」（第四）、六十八丁裏二行目「伊勢・ハリマ・喜治（郎）」（第五）、八十丁裏二行目「音・富八」（第七）。

〔朱譜〕 なし

〔備考〕 新出の興行。最上限は明和四年八月『関取千両幟』初演興行となるが、右の配役にはハリマ・絹・徳治を除くと、安永四・五年頃の江戸の顔ぶれが揃う（四年正月・五年正月の肥前、五年二月外記）。なお絹太夫を大坂から安永九年に下るひとと見定めると、利八の活動時期と揃わないので別人と考える。江戸の劇団は流動的で座を特定し難いが、最多の五人が一致する、五年二月外記座の前後と推定して、後考を俟つ。

摂州合邦辻 せつしゅうがっぼうがっじ

〔162〕の次の次

〔年代〕 安永二年（一七七三）二月五日 大坂北堀江市ノ側芝居
〔所在〕 金沢大学中央図書館 (W9124-5e)

〔記述〕 合邦壱丁表二行目「房」、九丁表一行目「綱」、廿二丁表一行目「入」、廿三丁表二行目「八重」（下の巻）、三十四丁表四行目「頼」、三十六丁裏五行目「此」。

〔朱譜〕 なし

〔備考〕 初演興行の配役と推定する。

当該作品の初演興行番付は未発見で知られていない。右の配役は、浄瑠璃本（通し本）の包紙の太夫連名とも整合し、初演の配役とみて矛盾はない。

忠臣後日断 ちゅうしんごにちばなし

〔177〕の次

〔年代〕 安永元年（一七七二）四月七日 大坂北堀江市の側芝居

〔所在〕 早稲田大学演劇博物館 (10-1590)

〔記述〕 壱丁表一行目「頼」、六丁表一行目「フサ」、九丁表五行目「此」、三十丁裏一行目「入り」、三十四丁裏四行目「時」。

〔朱譜〕 なし

〔備考〕 初演興行。入太夫以外は、下之巻の掛合にその名がみえるので、右の配役は初演時のものと思われる。入太夫は、この座の前後の興行に参加している。初演の番付が残らず、配役が不明であるので、参照のため掲げた。

〔177〕の次の次

〔年代〕 安永元年（一七七二）九月二十二日 江戸肥前座カ

〔所在〕 早稲田大学演劇博物館 (10-2109)

〔記述〕 六丁表一行目「テル」、九丁表六行目「スミ」、三十四丁裏四行目「オト」。

〔朱譜〕 なし

〔備考〕 江戸再演興行。同作七行本には、「明和九壬辰歳九月廿二日」（終丁

裏」と記した江戸・上総屋敷が残る。これは江戸での再演興行に関連して、再板されたものと推定される。

右の配役の三人は、翌安永二年正月・江戸肥前座『嫩榕葉相生源氏』初演興行番付の「輝太夫」「住太夫」「音太夫」に同一と思われる。これらか劇場を肥前座と推定する。

蝶花形名歌島台 ちようはながためいかのしまだい

[177] の次の次

〔年代〕 文政元年（二八一八）十月十二日 京錦天神芝居

〔所在〕 兵庫県立歴史博物館（淡路源之丞 01701）

〔記述〕 【六ツ目 中】 四十丁裏七行目「宮戸・勝治郎」、【六ツ目 切】 四

十四丁表二行目「綱・兵（吉）」、【八ツ目 切】 五十八丁表五行目「巴・伊（左衛門）」。

〔朱譜〕 十ウ4（十七オ2、「四冊目」〔廿式オ3〕、「五冊目」〔三十六オ1〕、「六冊目」〔三十八オ3〕、「七冊目」〔五十オ2〕、「八冊目」〔五十五オ3〕六十三ウ2）に朱譜がある（精粗の差が大きい）。

〔備考〕 墨書「淡路志筑・片山義雄」（後ろ表紙）はのちの所蔵者。

道中亀山断 どうちゆうかめやまばなし

[179] の次

〔年代〕 安永七年（二七七八）七月十七日 大坂北西の芝居

〔所在〕 東京都立中央図書館（東京誌料5668-31）

〔記述〕 【第壹】 亀山壱丁表一行目「是・鬼（市）」（第一天龍川の段）、【第壹】

五丁裏五行目「咲・伊（八）」、【第二】 八丁裏四行目「文字・喜（ち蔵）」（第貳日待の段）、【第二】 十四丁表四行目「政・弥（七）」、【第二】 十九丁裏五行目「男徳・鬼（市）」、【第三】 廿三丁表一行目「是・嘉蔵」（第三亀山屋鋪の段）、

【第三】 廿五丁裏六行目「咲・鬼（市）」、【第四】 三十丁表一行目「彦・弥（七）」（第四刀屋の段）、【第四】 三十五丁裏二行目「染・文（蔵）」、【第五】 四十九丁

表一行目「中・伊（八）」（第五大井川の段）、【第六】 五十三丁表一行目「文字・

駒（吉）」（第六在所の段）、【第六】 五十六丁表六行目「政・弥（七）」、【第七】 六十六丁表一行目「文字・伊（八）」（第七追善の段）、【第七】 七十二丁表七行目「男徳・鬼（市）」、【第八】 八十六丁表七行目「の・葉・宗（七）」（第八叡討の段）。

〔朱譜〕 なし。

〔備考〕 初演興行（太夫役割は初演番付Bに相当する）。絵尽に記す三味線弾きと相違があるので、参照のため掲げる。第一後半・第五に朱筆の書き込み（文字譜など）がある。

日本賢女鑑 にっぽんけんじょかがみ

[194] の次

〔年代〕 大阪音楽大学音楽博物館（0263-1838）

〔所在〕 明治四十年（一九〇七）五月十九日 大阪御霊文楽座

〔記述〕 【天守 口】 七十四丁裏一行目「さ路大夫」（十冊目）、【天守 奥】 八十六丁表七行目「時大夫・鶴太郎」。

〔朱譜〕 八十六オ7（九十ウ2にまばらに朱譜がある）。

〔備考〕 上演題は『鎌倉三代記』。前見返しに墨書「御霊文楽座にて・明治四十年五月十九日初日七月五日迄打・此鎌倉三代記の内へ天守のだんと片岡忠義の段と・くわへてやつた・四代目鶴沢鶴太郎所持」とある。

八陳守護城 はちじんしゅごのほんじょう

[203] の次

〔年代〕 天保九年（一八三八）四月二十八日 大坂稲荷社内東芝居

〔所在〕 日本民謡協会（町田資料768.5.7-10-A-050）

〔記述〕 なし

〔朱譜〕 【三浦やしき 切】 四十ウ2（四十六ウ7に朱譜がある）。

〔備考〕 前表紙に墨・朱二筆で「豊沢小猿」と記す。「小猿」出演の、当該作上演は、右興行のみ。朱譜のある「三浦やしき 切」は長門太夫の役場であるので、三味線は勝右衛門と考える。小猿は前年八年十一月に初出演。

〔211〕の次

〔年代〕明治二年（一八六九）三月三日 大阪いなり東芝居

〔所在〕鳥越文蔵氏（084）

〔記述〕【南蛮寺 切】九丁裏六行目「中太夫・清蔵」、【毒酒 中】十七丁裏三行目「音羽」、【毒酒 切】二十三丁表三行目「湊・団（平）」、【粟津】三十一丁表一行目「浪」（五冊目）、【此村やしき 中】三十六丁表五行目「染子」（六冊目）、【此村やしき 次】四十丁裏二行目「住」、【此村やしき 切】四十三丁裏三行目「巴」、【宇治のかた館 口】五十二丁表三行目「理久」（七冊目）、【宇治のかた館 奥】五十三丁裏七行目「染子太夫・吉治」、【加藤本城 中】五十六丁表四行目「実」（八冊目）、【加藤本城 切】十六（六十に相当）丁裏五行目「竹春」。

〔朱譜〕朱譜は殆どなく、朱筆で文字譜などの書き入れがある。

〔備考〕段の前後入れ替え（毒酒の前に、此村やしき・島を置く）。前表紙に「豊沢広七」、奥付に「豊沢広市改・広七」と朱書きがある。

端手姿鎌倉文談

はですがたかまくらぶんだん

〔214〕の次

〔年代〕安永六年（一七七七）江戸肥前座カ

〔所在〕早稲田大学演劇博物館（10-1653）

〔記述〕【初段】六丁表一行目「氏太夫・勘五郎」、【第貳 口】八丁裏二行目「湊太夫・勘五郎」、【第貳 奥】十二丁表六行目「佐渡・リ八」、【第三 式十丁裏二行目】町太夫・五四郎、廿三丁表六行目「折太・五四郎」、【第四 口】廿七丁表二行目「岬太夫・五四郎」、【第四 奥】三十丁表五行目「隠居・リ八」、【第五 式十六丁表二行目】伊勢・藤蔵、【第六 口】四十丁表二行目「佐渡・藤蔵」、【第六 奥】四十三丁表二行目「音太夫・キホウ」、【第七 跡】五十九丁表二行目「イセ・リ八」、【第八 口】六十二丁裏二行目「町太夫」、【第八 奥】六十五丁表五行目「氏太夫・弥七」。

〔朱譜〕本文に口三味線風の朱筆の書き込みがある。

〔備考〕右の配役は、安永六年二月の江戸肥前座の番付に一致する。同年正月の大坂初演以後、江戸で再演されたものと推定する。

花魁蒼八総 はなのあにつぼみのやつぶさ

〔220〕の次

〔年代〕明治二十七年（一八九四）一月二日 大阪御霊文楽座

〔所在〕大阪音楽大学音楽博物館（026-1842）

〔記述〕【神童示現】四十八丁裏三行目「竹本鶴尾太夫・エンジ」「竹本さの太夫・叶」（三の切富山のたん）。

〔朱譜〕発端矢取の浦の段（巻オ〜参オ5）、白箸川の段（八ウ2〜十オ2）、滝田城のだん（十オ7〜十三オ7）、口ノ奥拈華庵のだん（四十オ2〜四十八ウ2）、三の切富山のたん（四十八ウ4〜五十オ1）。四十九丁袋に挿入1葉に朱譜がある。

〔備考〕上演題は「里見八犬伝」。

ほかに明治三十年（一八九七）九月吉日、大阪御霊文楽座（上演題「里見八犬伝」）の配役も記す。

〔稔花庵〕四十式丁表一行目「叶太夫・鶴五郎」（口ノ奥拈華庵のだん）。

【整理中のため所在を伏せる分】

伊賀越道中双六 いがごえどうちゆうすごろく

[901]

〔年代〕明治四十二年（一九〇九）五月十六日 御霊文楽座

〔所在〕某家（Z）

〔記述〕【沼津 切】伊賀四十五丁裏一行目「染太夫・広作」（第六 沼津の段）、

【岡崎 中】六十五丁裏二行目「富太夫・兵内」（第八 岡崎の段）、【岡崎 次】

六十七丁表七行目「古鞠太夫・喜左衛門」。

〔朱譜〕第四前半（二十七ウ2まで）、第五、第六（松原）、第七、第八（七十八

オ3まで）に朱譜がある。第六・第八に赤貼紙がある（歌舞伎竹本としても使用か）。

〔備考〕上演題は「伊賀越」。前見返しに「嘉永二西六月吉日・豊沢猿童・

持有品」「座本中村瀧之助・嘉永二西六月大吉日改・名代座本中村瀧之助・

三味線鶴沢東作主」、初丁表に「中瀧座」と墨書がある。記譜者は、出演者でもある猿童か。

妹背山婦女庭訓

いもせやまおんなていきん

[902]

〔年代〕慶応四年（一八六八）二月吉日 京都四条道場北ノ小家

〔所在〕某家（M-012）

〔記述〕【大内】壹丁表一行目「須戸太夫・虎次」「郎」、【蝦夷やかた】十丁

裏六行目「葛大夫・鱗吾」、【蝦夷やかた】十六丁表七行目「津大夫・小兵」、

【蝦夷やかた】十九丁裏三行目「むら大夫・喜代七」、【葛籠山】廿三丁表一

行目「春栄・弥市」（第弐）、【芝六住家】廿七丁表四行目「和石・団六」、【芝

六住家】三十丁裏四行目「長尾・鱗糸」、【芝六住家】三十四丁表三行目「津

島・吉弥」、【花渡シ】四十五丁表一行目「相模・時造」、【山 カケ合】五十

三丁表四行目「津島・三光斎・吉弥・春太・氏太・吉兵衛」、【井戸替】六十

八丁表一行目「春栄・常吉」（第四）、【杉酒や】七十二丁裏三行目「津加・

豊吉」、【道行恋の小田巻】七十六丁表一行目「むら・津太・小賀・弥七・染

之助・時造・団六・喜代七・常吉・弥市・小兵・鱗吾」、【鱗七上使】七十九
丁裏一行目「三光斎・豊吉」、【入鹿御殿】八十七丁表六行目「氏太・源之助」、
【入鹿御殿】八十九丁表三行目「春太・吉兵衛」。
〔朱譜〕四ノ切奥・奥御殿に詳細な朱・貼紙がある（段切「今に伝へし物語り
目出度かりける御代の春」）。

[903]

〔年代〕明治四十一年（一九〇八）三月一日 御霊文楽座

〔所在〕某家（M-012）

〔記述〕【奥山】四十丁表三行目「文太夫・勝鳳」、【花渡し】四十五丁表一

行目「叶太夫・綱造」（墨）、【杉酒屋】七十二丁裏三行目「竹本津太夫・豊

沢猿糸」、【鱗七上使】八十丁裏六行目「竹本七五三太夫・鶴沢清六」。

〔朱譜〕四ノ切奥・奥御殿までに朱譜がある。

〔備考〕前見返しに「明治四拾壹年三月一日初日・文楽座ニテ妹背山婦女庭
訓・大序より大切迄」「大八所持」と墨書、「大八」隣に「一六才」と鉛筆書

きがある。記譜者は出演者でもある大八。

絵本大功記

えほんたいこうき

[904]

〔年代〕弘化元年（一八四四）八月吉日 大坂道頓堀竹田芝居

〔所在〕某家（H-05）

〔記述〕【大序 口】大功壹丁表二行目「大見太夫・長三郎」（発端（番付で

は「梅太夫」）、【大序 奥】三丁表一行目「奥・同太夫・猿之助・小定・庄治郎」、

【鉄扇 口】五丁表一行目「今太夫・三吾」（六月朔日の段（番付では「住尾太夫」）、

【鉄扇 奥】六丁表七行目「多賀大夫・源三」、【千本通り 口】九丁表七行

目「栄太夫・弥吉」、【千本通り 奥】十一丁裏四行目「今太夫・つる之助」、

【本能寺 口】十三丁裏五行目「桐太夫・長三郎」（同一日の段（番付では「和

太夫」）、【本能寺 中】十四丁裏六行目「栄大夫・高麗造」（番付では「大住太

夫」）、【本能寺 切】十七丁表二行目「島太夫・三根蔵」、【本能寺 跡】廿

一丁裏一行目「今大夫・清藏」(番付では「広大夫」)、「水責」口「廿八丁表二行目」峯太夫・藤藏」(同四日の段)、「久吉陣屋」口「卅一丁裏二行目」巴枝大夫・清三郎」(同五日の段)、「久吉陣屋」切「卅三丁裏三行目」春大夫・清八」、「妙心寺」口「五十一丁表一行目」峯太夫・楠太郎」(同六日の段)、「妙心寺」奥「五十二丁裏二行目」島大夫・三根藏」、「杉の森」口「五十六丁表二行目」春大夫・清八」(同七日の段)、「杉の森」切「六十丁表三行目」巴大夫・寛治」、「尼ヶ崎」口「七十六丁表二行目」大和大夫・源吉」(同十日の段)、「尼ヶ崎」切「七十九丁裏六行目」大住太夫・才治」。

〔朱譜〕発端〜二日(廿一ウ7まで)、四日〜七日(六十八ウ6まで)に朱譜がある。

〔備考〕上演題は『絵合太功記』。前見返しに「座本脇田国五郎」と墨書、「豊沢鶴之助」と朱書きがある。「野沢吉右」袋入り。墨書「野沢吉右」(表紙貼紙)。終丁裏に大正八年二月「文楽座二月興行」チラシを挟む(御霊文楽座「前絵本太功記」中傾城阿波の鳴戸「切卅三間堂棟由來」)。

発端〜二日の段は、桐太夫以外は番付に名がみえ、順序は一部が一致する。また三味線「猿之助」「小定」「庄治郎」「三吾」「清藏」は同芝居での直前、七月『酒呑童子話』興行の出演者であり、「桐太夫」は四月『本朝廿四孝』興行の出演者である。右の配役は、七月興行に続けて行われた段階、「年表」の番付は、太夫・三味線の一部入れ替えたとの段階(例：桐太夫の再退座・梅太夫の参加)と推定する。

1905]

〔年代〕明治三十三年(一九〇〇)十一月一日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家(N)

〔記述〕【杉の森御坊 中】五十六丁表二行目「叶太夫・吉松」。

〔朱譜〕「六月朔日の段」(五オ1〜九オ5)、「同二日の段」後半(十四オ4〜十七オ3)、「同七日の段」前半(五十六オ2〜六十オ2)に朱譜がある。

〔備考〕右の配役は、明治四十三年(一九一〇)一月二日御霊文楽座興行の可能性もある。

仮名手本忠臣蔵 かなでほんちゅうしんぐら

1906]

〔年代〕明治四十年(一九〇七)三月一日 大阪松島文楽座

〔所在〕某家(M-003)

〔記述〕【桃の井若狭之介屋敷 口】六丁表一行目「越喜太夫・吉助」(第貳)、「天下馬先」口「十二丁裏一行目」さ路太夫・広栄」(第三)、「天下馬先」奥「十五丁表七行目」勢見太夫・玉助」、「殿中刃傷」切「十七丁裏二行目」文太夫・勝鳳」、「裏門」廿丁裏六行目「源太夫・吉松」、「塩治判官館」切「廿三丁表一行目」末「竹本津太夫・猿糸 両師」(第四)、「山崎街道」三十丁裏一行目「末「竹本さの太夫・勝太郎 師」(墨)(第五)、「二ツ玉」三十三丁表七行目「時太夫・大三郎・小弓小作」(墨)、「勘平住家 中」三十六丁裏五行目「南部太夫・鶴太郎」(墨)、「勘平住家 切」四十二丁表六行目「染太夫・広作」、「山科閑居」切「六十七丁表一行目」撰津大掾・広助」、「天川屋 中」七十九丁表一行目「登勢太夫改・谷太夫・吉兵」、「天川屋 切」八十七丁表五行目「七五三太夫・綱造」、「兩國橋勢揃」九十二丁裏三行目「須磨太夫・谷登太夫・越可太夫、大四郎・大糸・猿松」、同後三人に「一日かはり」(墨)。

〔朱譜〕廿二オに貼紙がある。

〔備考〕前表紙に「鶴沢友造」「豊沢大八」とある。朱書「明治四拾年・三月一日初日・文楽座ニテ・豊沢「判読不能」」(後ろ表紙)。

1907]

〔年代〕明治四十二年(一九〇九)十一月一日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家(M-003)

〔記述〕【祇園一力】四十三丁裏上部に「御霊文楽ニテ・明治四十二年・十一月一日初日・前忠臣蔵・大序より九段目迄・切御所桜・由良助撰津大掾・力弥叶太夫・重太郎文太夫・弥五郎時太夫・喜太八むら太夫・仲居越喜太夫・亭主鶴尾太夫・仲居津る太夫・伴内古鞠太夫・九太夫七五三太夫・仲居常子

太夫・おかる南部太夫・平右エ門越路太夫・三味セシ猿糸（役名は墨筆）、【山科閑居 切】四十六丁裏九行目「撰津大掾・広助」。

〔朱譜〕七・九・十・十一に朱譜がある。

〔備考〕印「豊沢大八」「鶴友造」（前表紙）。記譜者は出演者でもある大八か。

鎌倉三代記 かまくらさんだいき

[908]

〔年代〕明治四十年（一九〇七）五月十九日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家（M-1020-1）

〔記述〕【城中評定 中】八丁表一行目「津直太夫・広栄」、【城中評定 切】

十丁表五行目「勢見太夫・三二・玉助・一日がはり」、【追手御門】十五丁表

七行目「谷太夫・大ノ助・大糸・一日カハリ」、【和田兵衛秀盛屋敷 口】十

八丁裏一行目行末「常子太夫・吉助」、【和田兵衛秀盛屋敷 中】十九丁裏六

行目「富太夫・花勇」、【和田兵衛秀盛屋敷 切】廿三丁表一行目「七五三太

夫・綱造」、【辛崎】三十一丁表一行目行末「南部太夫・寛治郎」、【香阪部九

郎隠家 中】三十四丁表一行目「谷栄太夫改・其太夫・勝太郎」、【入墨 口】

五十二丁表一行目「越喜太夫・猿作」、【入墨 奥】五十五丁表一行目「叶太

夫・豊の助」、【三浦之介母閑居 中】又六十丁表一行目「源太夫・吉松」、【三

浦之介母閑居 次】六十二丁表三行目「文太夫・勝鳳」、【三浦之介母閑居

切】六十五丁裏四行目「津太夫・猿糸」。

〔朱譜〕巻頭から三浦母閑居に朱譜がある（摺針・田植にはない）。初丁白紙貼

付。二丁に貼紙で、『花飾三代記』序詞を記す。

〔備考〕前見返しに「明治四拾年五月拾九日初日」と墨書がある。墨書「豊

沢大八所持」（表紙）。朱印「豊沢大八」「友造」（前見返し）。記譜者は、出演

者でもある大八か。

鬼一法眼三略巻 きいちほうげんさんりやくのまき

[909]

〔年代〕文政十一年（二八二八）四月十六日 大坂御霊社内

〔所在〕某家（M-031）

〔記述〕【大序 口】鬼二丁表一行目「鶴太・音吉」、【大序 次】三丁表七

行目「要太・与三」、【初段 口】十二丁裏二行目「後越・竹松」、【初段 切】

十五丁裏一行目「頼太夫・時造」、【式段目 口】二十四丁裏一行目「久太夫・

竹松」、【式段目 おく】二十九丁表一行目「後越・仲造」、【式段目 中】卅

二丁裏七行目「巴太夫・勝治郎」、【式段目 切】卅六丁表一行目「生駒太・

忠二郎」、【式段目 切】四十二丁裏一行目「君太夫・芳二郎」、【三段目 口】

四十六丁裏一行目「道太・竹松」、【三段目 おく】四十九丁表二行目「頼太・

時造」、【三段目 切】五十五丁表二行目「政太夫・兵吉」。

〔朱譜〕巻頭く七ウ3、十二ウ2く十七オ、二十四ウ1く七十ウ7までに朱

譜がある。

〔備考〕前見返しに「鶴沢竹松」と墨書、「竹松改 鶴沢燕三」と朱書きが

ある。後ろ見返しに「文政子四月・嶮竹亭宜律・門葉竹松」、後ろ表紙に「鶴

沢竹松」と墨書がある。朱印「鶴沢友造」（初丁表）。

祇園祭礼信仰記 ぎおんさいれいしんこうき

[910]

〔年代〕大正二年（一九一三）九月二十日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家（M-014）

〔記述〕【足利館 口】十三丁表六行目「越見・鶴尾・卯三郎・芳之助・一

日替り」、【足利館 中】十五丁表七行目「竹本鶴太夫・竹本浪花太夫。豊沢

拾三・鶴沢友之助・鶴沢友造。一日替り」、【足利館 次】十七丁裏七行目「津

国・広栄・吉助・勝平」、【足利館 切】廿二丁表二行目「むら・勝市」。

〔朱譜〕初段に朱譜がある。

〔備考〕前見返しに「大正二年九月廿日初日・前信仰記・中布引滝・切野崎」

と朱書き、「鶴沢友造所持」と墨書がある。

恋女房染分手綱 こいにようぼうそめわけたづな

[911]

〔年代〕大正元年（一九一〇）九月二十二日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家（M-027）

〔記述〕【四条河原】前見返し「此時の役 四条河原のたん。一日カワリ越代太夫・光太夫。一日カハリ 幸治郎・友造・玉勝」。

〔朱譜〕第二・第十（双六のみ）に朱譜がある。

〔備考〕前表紙に「大正元年九月求之」「大八改鶴沢友造」と墨書がある。前見返しに「大正元年九月廿二日初日。御霊社内文楽座ニ於テ。前恋女房染分手綱 大序より・重の井子別迄。中 お染・久松／妹背門松 生玉社前より・質店迄。切国性爺合戦 樓門より・三段目迄」とある。朱印「鶴沢友造」（前見返し・初丁表・終丁裏）。

木下蔭狭間合戦 このしたかげはさまがつせん

〔912〕

〔年代〕明治七年（一八七四）三月下旬 大阪道頓堀竹田芝居

〔所在〕某家（K-04）

〔記述〕【来作住家】「来作住家の段 切竹本梶太夫」の上方に「梶太夫後二染太夫ニ成ル」、同下方に「叶」、【壬生村】「壬生村の段 切豊竹古鞠太夫」の下方に「清六」、【奥御殿】「奥御殿の段 切竹本織太夫」の右に「ノチ綱太夫ト成」、同下方に「仙糸」。

〔朱譜〕「七之巻」前半・「九之巻」前半・「十之巻」後半に朱譜がある。「木下五十九」と「木下六十」の間に十二丁綴じ込み。

〔備考〕巻頭に番付を綴じ込む。番付に朱書「明治七戌三月下旬道頓堀竹田ノ芝居」とある。また番付には、同時上演の付け物にも次の書き入れがある。

【恨鮫鞘】「恨鮫鞘鰻谷のだん 切竹本浜太夫」の下方に「豊吉」。

また「三味線」欄にも次の書き入れがある。

「鶴沢清六」の上方に「彦・世」。「鶴沢叶」の上方に「北新地ノ二世」。

「鶴沢友治郎」の上方に「京都」。三味線欄上部に「仙糸後ニ広作ノ又六世広助に成松屋町ト云」「大正十一年当今六世広助也」。

三味線欄の書き入れはのちの所蔵者である鶴太郎の追記と考えられる。初丁

表に「四代目鶴沢鶴太郎所持」とある。墨書「鶴太郎」（表紙貼紙）。墨書「鶴沢鶴太郎」（後ろ表紙）。

〔913〕

〔年代〕大正五年（一九一六）十月一日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家（M-007）

〔記述〕【熱田社前 口】四十丁表一行目「鶴尾太夫。大之助・友造・一日替り」（六之巻）。

〔朱譜〕「貳之巻」「三之巻」「六之巻」の本文に朱譜がある。三十二丁裏・三十三丁表、四十一丁表、四十二丁裏・四十三丁表の本文には貼紙をして改めている。

〔備考〕前見返しに墨書「大正五年十月一日初日・御霊文楽座に於て」とある。前表紙に「野沢吉一郎」と朱書がある。「鶴沢友造」（墨印・墨書。表紙）。記譜者は友造。

なお廿七丁表四行目「時太」（五之巻）、四十八丁表六行目「麓太」（七之巻）は初演の配役。

生写朝顔話 しょううつしあさがおばなし

〔914〕

〔年代〕明治二十一年（一八八八）七月二十六日 大阪いなり彦六座

〔所在〕某家（H-11）

〔記述〕【大序 大内館】朝顔壺丁表「組登太夫・十九太夫・朝の太夫・八重太夫・田喜太夫・越太夫・新鞠太夫・伝昇・玉三郎・文吉・浜子・小作・富吉松」、【多々羅浜】六丁表一行目「笑太夫・鹿太夫・七助・広六」（松原のたん）、【宇治川】七丁裏二行目「宝太夫・惣太郎」（宇治のたん）、【宇治川】九丁裏二行目「かしく太夫・鶴助」、【宇治川】十一丁表七行目「かしく太夫・鶴助」、【真葛ヶ原】十四丁裏四行目「生島太夫・小弥七」（真葛が原の段）、【岡崎 中】十九丁表三行目「山登太夫・森之助」（岡崎のたん）、【岡崎 切】廿二丁裏一行目「若太夫・権平」、【明石舟別れ】廿八丁裏三行目「芳太夫・友

松」(明石船別れの段)、【弓之助やしき】卅壹丁裏二行目「かしく大夫・松三郎」(弓之助家鋪の段)、【弓之助やしき】三十四丁裏四行目「八重太夫・文次郎」、【小瀬川 口】五十一丁裏上方「豊沢作太郎」、【摩耶ヶ嶽 中】五十六丁表三行目「山登太夫・友松」(摩耶か嶽のたん)、【摩耶ヶ嶽 切】五十八丁表六行目「越太夫・吉二郎」(番付では「朝太夫」)、【摩耶ヶ嶽 切】五十九丁裏六行目「越太夫・吉三郎」(摩耶が嶽のたん 三段目の切(番付では「新朝太夫」)、【浜松小家 奥】六十七丁裏五行目「此大夫・仙友郎」。

【朱譜】巻頭から三十六ウ、五十六オ3、六十一ウ5、六十七ウ5、七十二ウに朱譜がある(五十四オ、「宿やのたん」にも)。七十二袋の中に挿入二葉ある。【備考】「野沢吉右」袋入り。袋反古として、「大阪御霊文楽座々主 松竹合名社」 「口演」を用いる。袋の後ろに「大正三年六月中旬文楽座に於て開演」と墨書がある。

[1915]

【年代】明治四十一年(一九〇八) 九月十七日 大阪御霊文楽座

【所在】某家(Z)

【記述】【宇治川 中】朝顔七丁裏二行目「常子太夫・大之助」。

【朱譜】「松原」(四オ1)、「宇治のだん」(七ウ2)、「真葛が原の段」(十ウ4)、「岡崎のたん」(十九オ3)、「明石船別れの段」(廿八ウ3、卅壹オ7)、【小瀬川のたん」(五十二オ1)、「摩耶か嶽のたん」(五十六オ3、五十九ウ5)、【浜松後半(七十四オ4)、「宿やのたん」(七十七オ6、八十六オ6)に朱譜がある。七十九丁袋に挿入一葉(むざんなるかな)に朱譜。

【備考】墨書「豊沢猿童・所持品」(前見返し)。記譜者は、出演者でもある猿童か。

[1916]

【年代】明治四十一年(一九〇八) 九月十七日 大阪御霊文楽座

【所在】某家(M-013)

【記述】【宇治川 切】十一丁表六行目「むら太夫・勇造」、【真葛ヶ原】十

四丁裏四行目「津はめ大夫・吉松」(真葛が原の段)、【秋月弓之助閑居 切】廿二丁裏一行目「竹本文太夫・鶴沢勝鳳」、【小瀬川 口】五十二丁表一行目「竹本津厂太夫・豊沢広栄」(小瀬川のたん)、【小瀬川 奥】五十四丁表二行目「津はめ太夫・吉松」、【摩耶ヶ嶽 中】五十六丁表三行目「其太夫・玉助」、【摩耶ヶ嶽 次】五十九丁裏六行目「竹本文太夫・鶴沢勝鳳」(摩耶が嶽のたん 三段目の切)、【摩耶ヶ嶽 切】六十一丁裏四行目「竹本染太夫・豊沢広作」。

【朱譜】宇治後半・真葛が原、小瀬川・摩耶が嶽に朱譜がある。

心中紙屋治兵衛

しんじゅうかみやじへい

[1917]

【年代】安永七年(二七七八) 四月二十一日 大坂北の新地西の芝居

【所在】某家(M-044)

【記述】【浮瀬】紙屋壱丁表二行目「是・タクジロ」、【浮瀬】四丁裏七行目「彦・タクジロ」、【新地茶屋】十三丁裏五行目「文字・千賀」(茶屋の段)、【長町】廿七丁表一行目「梶・喜市」(下の巻 長町の段)、【かみや内】三十五丁表一行目「咲・喜市」(紙屋の段)、【かみや内】四十七丁裏三行目「染・文蔵」。

【朱譜】なし

【備考】初演興行。番付では判らない三味線の組み合わせが判るので、参考のため掲げる。終丁裏「浄瑠璃太夫役割」の各行左隣に書き込みがある。「竹本彦太夫」左隣に「鶴沢度次郎」、【竹本文字太夫】左隣に「鶴沢喜蔵」、【竹本政太夫】左隣に「鶴沢伊八」、【竹本梶太夫】左隣に「鶴沢喜市」、【竹本咲太夫】左隣に「同」、【竹本染太夫】左隣に「鶴沢文蔵」。

菅原伝授手習鑑

すがわらでんじゆてならいかのみ

[1918]

【年代】明治十七年(一八八四) 九月吉日 大阪御霊文楽座

【所在】某家(M-001)

【記述】【太郎詮義】三十九丁裏五行目「津太夫・才治」(墨)、【喧嘩】六十丁表一行目「谷太夫」、【桜丸切腹】六十二丁裏七行目「六駄事六代目時太夫・

二代目叶」、【筑紫配所】七十丁表二行目「津太夫・才二」、【天拝山】七十二丁裏三行目「長尾・豊吉」、【寺入】七十九丁表一行目「路太夫」(番付では「谷太夫」)、【松王丸首実験】八十二丁表五行目「越路太夫・吉兵卫」。

【朱譜】未詳。

【備考】「六代目豊時」「豊竹時太夫」(朱印)。

太平記忠臣講釈

たいへいきちゆうしんこうしゃく

[1919]

【年代】大正二年(一九一三)六月一日 大阪御霊文楽座

【所在】某家 (M-029)

【記述】【大序 大下馬先】見返しに「大序 大下馬先 淀子太夫・南海太夫・小町太夫・三滝太夫・越穂太夫・三昇・吉右・六之助・友平・昇・大作」

【殿中刃傷】太平三丁裏二行目「路久太夫・文字太夫・源路太夫・英太夫・九重太夫・小富太夫・三吉・寛助・勝若」(朱筆を墨で上書き)、【裏門】六丁

裏四行目「津国太夫・卯三郎」(墨)、【鞘割 口】八丁表四行目「越代太夫・

光太夫・友造」、【鞘割 中】十丁裏四行目「越見太夫・鶴太夫・吉助・広栄」、

【鞘割 奥】十五丁表一行目「むら太夫・玉助・歌助」、【九太夫切腹 中】

十九丁裏一行目「鶴尾・浪花・鶴助・友之助」(第三)、【九太夫切腹 切】

廿三丁裏三行目「時太夫・叶・勝市」、【白川村兵法指南処 中】三十二丁表

四行目「淀太夫・綱尾太夫・一弥・兵内」(第四)、【白川村兵法指南処 切】

三十八丁裏二行目「叶太夫・寛次郎・琴友平」。

【朱譜】巻頭〜四十三ウまでに朱譜がある。十九ウ1冒頭に「注意 二手有

り」と朱書き。

【備考】巻末に貼紙二葉がある。終丁裏貼紙に「大正貳年六月一日初日御霊

文楽座ニ於テ午前正七時開演」云々。後ろ見返しに太夫三味線役割を記す。

朱印「鶴沢友造」(初丁表)。

玉藻前臈袂 たまものまえあさひのたもと

[1920]

【年代】天保五年(一八三四)四月吉日 京誓願寺芝居

【所在】某家 (H-16)

【記述】【班足玉御殿 切】玉八丁裏三行目「実太夫・徳太郎」、【大公望漁】

廿壹丁裏三行目「若太夫・勝太郎」(大公望漁の段)。

【朱譜】八ウ3〜十二オ3、廿壹ウ3〜廿三ウ7、六十オ3〜六十式ウ7に

朱譜がある。

【備考】墨印「鶴沢清六」(前見返し・終丁裏・奥付)。墨印「鶴沢徳太郎」(初

丁表・終丁裏)。「野沢吉右」袋入り。

[1921]

【年代】大正七年(一九一八)三月二十三日 京都新京極竹豊座

【所在】某家 (K-08)

【記述】【太公望漁】玉廿壹丁裏四行目標題下「春雄太夫・庄造」(大公望漁

の段)、【紉王御殿】廿六丁表一行目「古金・広治」、【楼門】三十六ノ七丁裏

二行目「三好太夫・小兵」(楼門の段)。

【朱譜】廿壹ウ4〜四十五オ5まで朱譜(二筆)がある。

【備考】朱印「竹沢弥十郎」(初丁表)。

[1922]

【年代】昭和二十五年(一九五〇)三月九日 東京新橋演舞場

【所在】某家 (Z)

【記述】【石大臣道春館】玉四十五丁表五行目「大隅・清六」。

【朱譜】「道春館」(玉四十式オ4〜五十五オ6)に朱譜がある。

箱根霊験鬨討 はこねれいげんいざりのあだうち

[1923]

【年代】明治四十三(一九一〇)六月十七日 大阪御霊文楽座

【所在】某家 (M-025-2)

【記述】【桃山城馬場先】箱四丁裏二行目「勇一」(二冊目)、同裏六行目「勝

勇、六丁表三行目「清花」、同裏六行目「勝若」、七丁裏二行目「三吉」、八丁表六行目「大八」。

〔朱譜〕二冊目に朱譜がある。

〔備考〕前見返しに「明治四十三年六月興行 豊沢大八所有」と朱書きがある。朱印「鶴沢友造」(初丁表・終丁裏)。

八陳守護城 はちじんしゅごのほんじょう

〔924〕

〔年代〕明治四十三年(二九一〇)五月十四日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家(M-008)

〔記述〕【打出浜辺】口 八三十一丁表一行目「谷と大夫・広栄」、【木村屋敷】中 三十六丁表五行目「其大夫・玉助」、【木村屋敷】次 四十丁裏二行目「富大夫・三二」。

〔朱譜〕第一・第三の口に朱譜がある。

彦山権現誓助剣 ひこさんごんげんちかいのすけだち

〔925〕

〔年代〕文政十一年(二八二八)七月十五日 大坂御霊境内

〔所在〕某家(M-016)

〔記述〕【大序】口 誓壺丁表一行目「要太・千」助、【式目】口 七丁表四行目「歌門太・秀治郎」(第二)、【式目】おく 九丁表七行目「武太・燕三」、【三目】口 十二丁表一行目「久太・扇助」(第三)、【三目】中 十八丁表一行目「勝太・仲造」、【三目】切 廿二丁裏五行目「綾太・忠治」、【四目】口 三十丁表五行目「道太・秀治」、【四目】おく 三十四丁表五行目「の太夫・燕三」、【五目】口 卅七丁表一行目「頼太夫・重造」(第五)、【五目】切 四十丁表四行目「君・勝右衛門」、【六目】口 五十四丁表一行目「久太・仲造」(第六)、【六目】おく 五十七丁表三行目「生駒・忠治」、【七目】口 六十一丁表四行目「鐘太夫・重造」(第七)、【七目】切 六十三丁裏二行目「筆太夫・寛二」、【八目】口 七十二丁裏七行目「筆

戸・重造」(第八)、【八目】おく 七十四丁裏七行目「町太・亀吉」、【九目】口 七十九丁裏七行目「生駒・芳治郎」(第九)、【九目】切 八十四丁表一行目「巴太夫・勝治郎」。

〔朱譜〕未詳

〔備考〕終丁裏にも、朱筆で当該興行の配役を記す。「彦山 大序より九段目迄。大序 要太夫・管太夫。式目 口 歌門太夫・切武太夫。三目 口 久太夫・中勝太夫・切綾太夫。四目 口 道太夫・切の太夫」(以上上段)、「五目 口 頼太夫・切君太夫。六目 口 久太夫・切生駒太夫。七目 口 鐘太夫・切筆太夫。八目 口 筆戸太夫・切町太夫。九目 口 生駒太夫・切巴太夫」(以上中段)、「三味線 勝治郎・寛二・重造・燕三・亀三郎・与三郎・金造・芳二郎・勝右衛門・善太郎・亀吉・宗二郎・徳太郎・秀治郎・扇助・仲造・忠治郎」(以上下段)、「切浄瑠璃 加々見山」(六目) 口 勝太夫・切君太夫。七目 口 頼太夫・切かけ合 巴太夫・筆太夫、七月十五日出・大入くく。なお「金四・朝右衛門・団八・小兵・金吾」ともあるが、右興行とは関連がない。

十八・四十の袋に挿入一丁ずつあり。朱書「豊沢大八」(前見返し)。朱印「豊竹時太夫」(六代目豊時)「鶴沢友造」(初丁表)。墨書「嘉永四亥六十三年」(終丁表)。墨書「文駄改豊竹時太夫求之」(奥付)。

〔926〕

〔年代〕明治七年(二八七四)十一月吉日 大阪松島芝居

〔所在〕某家(N-11)

〔記述〕【小栗栖】切 六十三丁裏二行目「住太夫・勝七」、【毛谷村六介住家】切 八十四丁表一行目「越太夫・浜右衛門」。

〔朱譜〕第三(十二オ1〜十三オ6。廿六オ1〜三十オ4)、第四(三十四オ5〜卅六ウ6)、第五(卅七オ2〜五十三ウ6)、第六(五十四オ1〜)、第七(六十一オ3〜七十二ウ6)、第八(七十五オ1〜七十九ウ6、八十ウ1〜九十三ウ3)に朱譜がある。

〔備考〕ほかに明治三十七年(二九〇四)四月十日、大阪御霊文楽座の配役

も記す。

【吉岡一味斎屋敷 中】五十五丁裏四行目「文・勝鳳」。

終丁裏に「明治卅七年四月十日 竹本登勢太夫」(墨書)、続けて「氏・当方へゆづり受る」(朱書き)とある。朱書「野沢勝治郎」(前後表紙)。

【927】

【年代】明治四十年(一九〇七) 九月吉日 大阪御霊文楽座

【所在】某家(N)

【記述】【毛利元就館 切】挟み込み一葉「むら太夫・勇造」(鉛筆)。

【朱譜】前見返し、誓十八ウ1〜五十四ウ3、六十一ウ4〜九十三オ6に朱譜がある。八と九の間に挟み込み一葉あつて、これに朱譜がある。

【吉丸稚桜 ひよしまるわかぎのさくら

【928】

【年代】明治四十年(一九〇七) 一月二日 大阪御霊文楽座

【所在】某家(M-028)

【記述】【大序 竹生島】前見返し「大序 文後太夫・南勢太夫・特尾太夫・稲葉太夫・福太夫・富子太夫・喜太夫・文字ヲ太夫・路久太夫・いさ太夫・広見太夫」(上段)、「大序 吉久・勝勇・三吉・小作・助八・勝童」(中段)、「寛吾・大八・猿童・芳の助・勝平・勇三郎・勝若」(下段)。「今川義元館」日吉三丁表五行目「今川義元館・南勢太夫・一弥」(発端)、「今川義元館」四丁表五行目「谷栄太夫・吉助」、【清洲城外壺割】十九丁表五行目「津直太夫・広栄」(初段)、「清洲城外壺割」二十一丁裏一行目「竹本勢見太夫 墨・玉助」、【茶碗屋源左衛門内 中】廿五丁裏一行目「登勢太夫・吉兵」、【茶碗屋源左衛門内 切】廿八丁裏一行目「竹本文太夫・勝鳳」、【浜名八幡宮】三十六丁表一行目「竹本さの太夫・勝太郎」(弐段目)、「松下屋敷稽古場 口」四十一丁表四行目「越喜太夫・猿作」、【猪狩 口】五十六丁裏四行目「富太夫・花勇」(墨)を朱線で消す(三段目)、「割普請 奥」五十七丁裏三行目「竹本富太夫・花勇」(番付では叶太夫)、「大手先」六十五丁裏一行目「むら太夫・勇造」

(鉛筆)、【小牧山城中 切】七十一丁裏二行目「三段目切。津太夫・猿糸 糸」(墨)。

【朱譜】三オ5〜八オ4、十九オ5〜四十三ウ1、五十六ウ4〜六十七ウ7に朱譜がある。六オに貼紙(「吉丸誕生」冒頭の本文を記す)。

【備考】墨書「明治四拾年一月二日初日・文楽座ニテ・豊沢大八所持」(後ろ表紙)。朱印「鶴沢友造」(初丁表・終丁裏)。記譜者は出演者でもある大八。

ひらかな盛衰記 ひらがなせいすいき

【929】

【年代】明治三十年(一八九七) 七月一日 大阪御霊文楽座

【所在】某家(N-11)

【記述】【粟津松原 口】十丁表二行目「登瀬太夫・勝友」、【粟津松原 切】十三丁表六行目「むら太夫・勇造」、【鎌田隠家 口】二十丁表一行目「殿母太夫・勝友」、【鎌田隠家 奥】廿一丁裏五行目「源太夫・才造」、【梶原館 中】廿六丁裏二行目「叶太夫・花勇」、【源太物語】廿九丁裏二行目「七五三・むら太夫・源太夫・綾太夫・勝右衛門」、【勘当 切】三十二丁表五行目「七五三・清六」、【勘当 切】三十三丁表一行目「染太夫・勝鳳」を改めて「七五三・清六」、【笹引 奥】四十七丁表四行目「綾太夫・勝右衛門」、【逆櫓 中】五十二丁裏七行目「呂瀬太夫・豊之助」、【逆櫓 切】五十六丁表二行目「呂太夫・叶」、【辻法印 口】七十丁表一行目「鶴尾太夫・綱造」、【辻法印 奥】七十二丁表二行目「染太夫・勝鳳」、【神崎揚屋 切】七十六丁表六行目「越路太夫・広助」、【神崎揚屋 跡】八十三丁裏五行目「叶太夫・鶴五郎」。

【朱譜】盛六オ2〜七オ4、十オ2〜十九ウ7、廿一ウ5〜三十八ウ7、四十一ウ1〜五十六オ1、七十二オ2〜八十八ウに朱譜がある。前見返しに朱書「もくしていらへなし・二段目切ヲクリ・七五三太夫・清六」とある。

【備考】墨書「御霊文楽座にて明治三十年七月一日初日・今月十九日迄打・二世鶴沢清八」。二ノ切勘当は番付の染太夫でなく、七五三太夫へ変更されたい。

本朝廿四孝 ほんちようにじゅうしこう

[9301]

〔年代〕天保十年（一八三九）九月二十九日 大坂稲荷社内東芝居

〔所在〕某家（M-005）

〔記述〕【式段目 切】三十二丁表二行目「勢「イ見」太夫・兵吉」。

〔朱譜〕二ノ切に朱譜がある。

〔備考〕前見返しに「天保十年九月廿九日初日稲荷芝居」と朱書き。

[9311]

〔年代〕明治四十二年（一九〇九）九月十日 大阪御霊文楽座

〔所在〕某家（M-005）

〔記述〕【足利館 口】九丁表二行目「津国太夫・三味線記載なし」、【足利館 中】十丁裏一行目「其太夫・吉助」、【足利館 次】十二丁表五行目「谷太夫・玉助」、【諏訪明神 口】廿丁裏三行目「淀太夫・捨三・勝平」、【諏訪明神 奥】廿二丁裏三行目「むら太夫・勇造」「大八此場カハリ勤ムル也」、

【信玄館 中】廿八丁表六行目「鶴尾太夫・兵三・大糸」、【信玄館 次】廿九丁表三行目「富太夫・吉松」、【信玄館 切】三十二丁表一行目「七五三太夫・綱造」、【桔梗ヶ原 口】四十一丁裏一行目「常子太夫・一弥・芳の助」、

【桔梗ヶ原 奥】四十四丁表三行目「古鞠太夫・清六」、【景勝下駄】四十九丁表四行目「文太夫・寛治郎」、【勘助物語り 切】五十四丁表五行目「染太夫・広作」、【景勝上使】七十七丁裏六行目「源太夫・勝太郎」。

〔朱譜〕三十八ウ上方に「其訳語らんよつく聞れよメリヤス」とメリヤスの手を記す。四十九オ7「お種か手枕に」の左に「ハツ橋今ワお種と名をかへて」と朱書き。三ノ切「山城大きに」に朱譜なし。四ノ切「見へにけり。」まで朱譜あり、「衣冠正しき」へ飛ぶ。

〔備考〕朱書「明治四拾貳年九月興行・九月十日初日・御霊文楽座於テ・豊沢大八所有品也」（前見返し）。

[9321]

〔年代〕大正八年（一九一九）一月一日 京都竹豊座

〔所在〕某家（K-13）

〔記述〕【諏訪明神百度参】廿丁裏四行目「松重・拙者」、【力石】廿四丁裏七行目「春美・善兵衛」、【武田信玄館】廿八丁表五行目「松重・庄造」、【武田信玄館】三十二丁表一行目「古金・兵之助」、【鉄砲渡し】八十三丁裏三行目「南ト・宗二郎」、【十種香】八十五丁裏二行目「ミス・広ザエモン」。

〔朱譜〕孝老オ2〜四ウ7、廿ウ4〜四十四オ6、八十一オ7〜八十五ウ1、九十三ウ2〜九十六オ2に朱譜がある。八十六オ6「衣冠正しき」前へ挿入分として、「奥方よりの御上使とは何事やらんとつ、しんでいかん正しく出向ふ」と記している。

〔備考〕朱印「竹沢弥十郎」（初丁表・終丁裏）。墨印「鶴沢叶太郎」（題簽・初丁表）。

三日太平記 みつかたいへいき

[9331]

〔年代〕嘉永二年（一八四九）頃 大坂カ

〔所在〕某家（乙）

〔記述〕三日三十八丁表七行目「豊竹三玉太夫・鶴沢市造」、七十九丁表五行目「豊竹三玉大夫持主」（第九 章題下）、八十三丁裏一行目「三玉（墨・市造（朱）」。

〔朱譜〕三十八オ7〜四十三オ3、七十二オ1〜七十三ウ1、七十九オ5〜九十四ウ4に朱譜がある。

〔備考〕三玉太夫は、嘉永二年（一八四九）四月刊見立番付「三都太夫三味線人形見競鑑」に、「西之方」「子供部前頭」九枚目にみえるのみ。同番付に市造の名はみえず、両人が同座する時期を特定出来ない。今は仮に、三玉太夫の活動時期におき、後考を俟つ。

前表紙に「鶴沢高麗（朱）造（墨）」、「三玉（墨）」とある。終丁裏に「持主三玉」と墨書、「三代目鶴沢友之助（インク）」とある。墨印「彦六座」（前見返し・終丁裏）。

浄瑠璃本（通し本）の配役書入本の効用

義経干本桜 よしつねせんぼんざくら

[1934]

〔年代〕慶応四年（一八六八）三月吉日 京都四条道場北ノ小家

〔所在〕 某家 (M-1006)

〔記述〕【稲荷の森】廿三丁表一行目「須广・燕勝」（第二）、【渡海屋 口】廿九丁裏七行目「春戸・常吉」、【渡海屋 中】三十五丁裏六行目「和石軒・団六」、【渡海屋 切】三十七丁表七行目「津加・豊吉」、【義経御殿 切】八十五丁裏六行目「津島・吉弥」。

〔朱譜〕【第二】「飛ぶがごとくに。」までに朱譜がある。

〔備考〕朱印「六代目豊時」「豊竹時大夫」「田村」「仏粉」「松朝」「豊沢大八」「鶴沢友造」（初丁表・終丁裏）。朱印「豊沢大八」（序切、十二才）。

[1935]

〔年代〕明治二十五年（一八九二）三月二十日 大阪御霊文楽座

〔所在〕 某家 (K-14)

〔記述〕【北野馬場先】千六丁表五行目「品尾太夫・花」、【堀川御所 中】十一丁裏二行目「久太夫」、【川連法眼館 切】八十五丁裏七行目「津太夫」。
〔朱譜〕大序、廿七才1〜廿九ウ7、三十五ウ6〜四十四ウ7、五十五才3以降、八十才4〜八十九才5に朱がある。大序「四海やう」〜「卯の花も」。朱線引き。才オ7上に「へ三重 行そらの」と墨書がある。三十七ウ1に「二世政大夫場也・二世叶師糸也」と墨書。第二「詰寄ば。△」〜「△弁慶押」は省略（段切の省略はないらしい）。八十五ウ6に貼紙「園原や人の身のういぶかしくうかゝい出るさし足も」と墨書。

〔備考〕前見返しに「四世鶴沢鶴太郎」（墨書）、「二代目鶴沢鶴五郎持所本也」（朱書）、「二世鶴沢つる五郎丸本」（墨書）、「昭和十七年度 二世鶴沢清八成ル」（青インク）、「御霊文楽座にて・明治廿五年三月廿日初日四月十五日迄打」（墨書）、「四世鶴沢叶所持」（朱書）とある。朱書「鶴沢鶴五郎」（前表紙・後ろ見返し）。

ほかに大正八年（一九一九）三月十六日、大阪御霊文楽座の配役も記す。

【稲荷森 奥】廿七丁表一行目「静太夫・叶」。

また【三段目】四十五丁表一行目「島」、五十五丁表三行目「此」、【四段目】七十四丁裏一行目「百合」、八十丁表四行目（行中）「錦」、八十五丁裏七行目「政」は初演の配役。

[1936]

〔年代〕明治三十八年（一九〇五）三月一日 大阪御霊文楽座

〔所在〕 某家 (K-15)

〔記述〕【榎の木 口】四十五丁表一行目「越喜太夫・亀太郎」、【榎の木 奥】四十六丁表五行目「文太夫・勝鳳」。

〔朱譜〕大序、十四ウ7〜廿才オ6、廿三才1〜三十七才オ7（飛ぶがごとくにまで）、四十六才5〜四十九ウ7、七十二才1〜七十四才オ7に朱譜がある。七十三袋に一葉挿入（道行挿入二文と朱譜）。千本才「四海」に△、「皆白旗」の前に△とある（この間、省略と考える）。同才5上に「へ三重 行そらの」と墨書。

〔備考〕前見返しに「此本鶴沢豊吉伝吉様之御家内より・明治卅三年四月廿日に買求物也・実正なり・四代目鶴沢鶴太郎所持」と墨書、「鶴沢叶太郎」と墨印がある。墨印「鶴沢叶太郎」（題簽・初丁表）。墨書「鶴沢鶴太郎」（後ろ表紙貼紙）。

ほかに大正六年（一九一七）四月十八日、大阪御霊文楽座の配役も記す。

【堀川御所 切】千本十四丁裏七行目「駒太夫・吉五郎」。

浄瑠璃本(通し本)の配役書入本の年月順総索引

一、本索引は、拙稿「浄瑠璃本(通し本)の配役書入本について」の上中下三編と、本稿の補遺・追加に載せる配役書入本を、年月順に排列して、検索の要に供するものである。

一、各資料については、「通し番号」「興行初日の月日」「作品名」「興行地十劇場」「所蔵機関」を記した。なお年号(西暦)は見出しとしてまとめた。

享保十九年(一七三四)

[045] 二月一日 応神天皇八白幡 大坂竹本座 名古屋市蓬左文庫(長友氏)

[045] の次 二月一日 応神天皇八白幡 大坂竹本座 関東短期大学

元文元年(一七三六)

[108] 十年十三日 猿丸太夫鹿卷毫 大坂竹本座 京都府立総合資料館

元文二年(一七三七)

[090] 一月二十八日 御所桜堀川夜討 大坂竹本座 日本大学学術総合情報センター

ター

[059] の次 七月二十一日 釜淵双級巴 大坂豊竹座 日本民謡協会

元文三年(一七三八)

[083] 一月二十五日 行平磯馴松 大坂竹本座 香川県立ミュージアム(近石泰秋資料)

宝暦元年(一七五一)

[214] 八月朔日 八幡太郎東海碗 江戸肥前座 大阪府立中之島図書館

宝暦二年(一七五二)

[087] 義経千本桜 京竹本座カ 広島文教女子大学図書館

宝暦六年(一七五六)

[172] 十月十五日 平惟茂凱陣紅葉 大坂竹本座カ 関西大学図書館

宝暦七年(一七五七)

[063] の次 十二月五日 祇園祭礼信仰記 大坂豊竹座 国立国会図書館

宝暦八年(一七五八)

[150] 五月十五日 菅原伝授手習鑑 大坂曾根崎新地芝居 日本大学学術総合情報センター

宝暦八—十一年(一七五八—六二)

[253] 北条時頼記 江戸肥前座カ 匿名定氏

宝暦九年(一七五九)

[166] 九月十六日 太平記菊水之巻 大坂竹本座 日本大学学術総合情報センター

[242] ひらかな盛衰記 京竹本座カ 山形県立博物館教育資料館

宝暦九—十年(一七五九—六〇)

[001] 芦屋道満大内鑑 江戸肥前座カ 早稲田大学演劇博物館

[051] の次 大塔宮囃鏡 江戸肥前座カ 関西大学図書館

宝暦十一年(一七六一)

[284] 由良湊千軒長者 江戸肥前座カ 米国議会図書館

宝暦十二年(一七六二)

[091] 一月二日 古戦場鐘懸の松 江戸土佐座 天理大学附属天理図書館

[091] 一月二日 古戦場鐘懸の松 江戸肥前座 天理大学附属天理図書館

宝暦十三年(一七六三)

[041] 一月八日 奥州安達原 京都竹本座 日本大学学術総合情報センター

[254] 四月十九日 新舞台咲分牡丹 大坂豊竹座 国立文楽劇場

[255] 四月十九日 新舞台咲分牡丹 大坂豊竹座 園田女子大学図書館

明和二年(一七六五)

[290] 二月五日 蘭奢待新田系図 京都竹本座カ 大阪府立大学図書館

[291] 二月五日 蘭奢待新田系図 京都竹本座カ 早稲田大学中央図書館

[292] 二月五日 蘭奢待新田系図 京都竹本座カ 京都府立総合資料館

明和三年(一七六六)

[061] 二月頃 鬼一法眼三略巻 京都カ 日本大学学術総合情報センター

明和五年(一七六八)

[075] 七月十五日 粧水絹川堤 大坂阿弥陀池門前芝居 瀬戸内海歴史民俗資料館

[076] 七月十五日 粧水絹川堤 大坂阿弥陀池門前芝居 関西大学図書館

[077] 七月十五日 粧水絹川堤 大坂阿弥陀池門前芝居 国立文楽劇場

[077] の次 七月十五日 粧水絹川堤 大坂阿弥陀池門前芝居 香川県立ミュージアム(近石泰秋資料)

[059] の次の次の次 十二月二十一日 紙子仕立両面鑑 大坂北堀江市ノ側芝居 国立国会図書館

[059] の次の次の次 十二月二十一日 紙子仕立両面鑑 大坂北堀江市ノ側芝居 因協会(大阪市立中央図書館)

明和六年(一七六九)

[179] 四月八日 追善五十年忌 大坂北堀江市ノ側芝居 広島文教女子大学図書館

[110] の次 七月十九日 時代世話女節用 江戸肥前座 関東短期大学

明和七年(一七七〇)

[046] 二月十九日 近江源氏先陣館 京都四条北側芝居 早稲田大学演劇博物館

[278] 四月十九日 往昔模様亀山染 江戸肥前座 園田女子大学近松研究所(今尾哲也氏旧蔵)

安永元年(一七七二)

[177] の次 四月七日 忠臣後日晰 大坂北堀江市の側芝居 早稲田大学演劇博物館

[177] の次の次 九月二十二日 忠臣後日晰 江戸肥前座 早稲田大学演劇博物館

安永二年(一七七三)

[001] の次 九月二十二日 忠臣後日晰 江戸肥前座 早稲田大学演劇博物館

安永二年(一七七三)

[177] の次 九月二十二日 忠臣後日晰 江戸肥前座 早稲田大学演劇博物館

安永二年(一七七三)

[177] の次 九月二十二日 忠臣後日晰 江戸肥前座 早稲田大学演劇博物館

- [162] の次の次 二月五日 摂州合邦辻 大坂北堀江市ノ側芝居 金沢大学附属図書館
 [072] の次 冬 軍法富士見西行 江戸カ 延岡市内藤記念館
 安永四一五年(一七七五—六)
 [162] の次 年月未詳 花軍寿永春・関取千両幟 江戸外記座カ 香川県立ミュージアム(近石泰秋資料)
 安永五年(一七七六)
 [282] 十二月十三日頃 山崎与次兵衛寿の門松 大坂曾根崎新地西芝居 大阪府立中之島図書館
 安永六年(一七七七)
 [020] の次 三月三日 糸桜本町育 江戸外記座 大阪府立中之島図書館
 [214] の次 端手姿鎌倉文談 江戸肥前座カ 早稲田大学演劇博物館
 安永七年(一七七八)
 [020] の次の次の次 一月二日 妹背山婦女庭訓 江戸外記座芝居 原道生氏
 [917] 四月二十一日 心中紙屋治兵衛 大坂北の新地西の芝居 某家
 [179] の次 七月十七日 道中亀山噺 東京都立中央図書館 大坂北西の芝居
 [277] 九月二十三日 往古曾根崎村噺 大坂北西ノ芝居 日本民謡協会
 安永九年(一七八〇)
 [223] 二月九日 東山殿幼稚物語 大坂北堀江市ノ側芝居 大東急記念文庫
 [224] 二月九日 東山殿幼稚物語 大坂北堀江市ノ側芝居 早稲田大学演劇博物館
 [146] 九月二十八日 新版歌祭文 大坂竹本座 国立文楽劇場
 天明六年(一七八六)
 [240] 六月五日 比良嶽雪見陣立 大坂道とんぼり東の芝居 新潟大学附属図書館
 天明七年(一七八七)
 [164] 十月十九日 大功艶書合 大坂道とんぼり竹田芝居 国立劇場
 寛政初(一七九〇—九三)
 [054] 仮名手本忠臣蔵 大坂カ 南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館
 寛政四年(一七九二)
 [151] 三月二日 菅原伝授手習鑑 大坂道頓堀東芝居 国立文楽劇場
 [053B] 八月一日 仮名手本忠臣蔵 大坂道頓堀東芝居 早稲田大学演劇博物館
 [181] 融大臣塩竈桜花 大坂カ 東京都立中央図書館
 寛政十年(一七九八)
 [280] 一月二十八日 比良御陣雪外形 大坂北堀江市之側新芝居 関西大学図書館
 [163] 八月二日 千里竹雪曙 大坂ぼり江市ば西がわ芝居 早稲田大学演劇博物館
 寛政十一年(一七九九)
 [032] 七月十二日 絵本大功記 大坂道頓堀若太夫芝居 早稲田大学演劇博物館
 享和元年(一八〇一)
 [233] 十月十三日 日吉丸稚桜 大坂北堀江西側芝居 国立国会図書館
- 文化二年(一八〇五)
 [187] 十月一日 日蓮聖人御法海 大坂道とんぼり大西芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 [060] 唐土織日本手利 江戸カ 早稲田大学演劇博物館
 文化三年(一八〇六)
 [165] 三月三日 大功艶書合 京都四条南側大芝居 国立文楽劇場
 [279] 往昔模様亀山染 江戸大薩摩座カ 早稲田大学演劇博物館
 [293] 蘭奢待新田系図 江戸大薩摩座カ 国立文楽劇場
 文化三十四年(一八〇六—七)
 [020] の次の次 糸桜本町育 江戸カ 東京大学教養学部
 文化六年(一八〇九)
 [008] 十二月二十日 伊賀越乗掛合羽 大坂北堀江荒木芝居 東京都立中央図書館
 文化七年(一八一〇)
 [183] 六月八日 夏衣裳鴈染 大坂ぼり江荒木芝居 早稲田大学中央図書館
 文化十一年(一八一四)
 [094] 五月十一日 木下蔭狭間合戦 大坂いなり社内 南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館
 [243] 八月九日 ひらかな盛衰記 大坂いなり境内 尾道市立中央図書館
 文化十四年(一八一七)
 [109] 七月十四日 三国無双奴請状 大坂いなり境内 国立文楽劇場
 [110] 七月十四日 三国無双奴請状 大坂いなり境内 関西大学図書館
 文政元年(一八一八)
 [021] 八月八日 一谷嫩軍記 大坂北堀江市ノ側芝居 国立文楽劇場
 [087] 八月二十日 国性爺合戦 大坂いなり社内芝居 日本大学学術総合情報センター
 [177] の次の次の次 十月十二日 蝶花形名歌島台 京錦天神芝居 兵庫県立歴史博物館
 文政二年(一八一九)
 [095] 二月二十三日 木下蔭狭間合戦 大坂いなり境内 早稲田大学演劇博物館
 [096] 二月二十三日 木下蔭狭間合戦 大坂いなり境内 早稲田大学演劇博物館
 [147] 八月二日 神靈矢口渡 大坂いなり境内 宮本瑞夫氏
 [147] の次 八月二日 神靈矢口渡 大坂いなり境内 関東短期大学
 文政三年(一八二〇)
 [173] 三月二十五日 玉藻前蟻袂 大坂角丸芝居 大阪音楽大学音楽博物館
 [092] 七月二十一日 奥州安達原 大坂御霊社内 神戸女子大学図書館
 [241] 八月十六日 比良嶽雪見陣立 大坂いなり境内芝居 香川県立ミュージアム(近石泰秋資料)

- 文政四年（一八二一）
 [231] 八月四日 姫小松子日の遊 大坂いなり社内 国立文楽劇場
 文政五年（一八二二）
 [244] 三月二十七日 ひらかな盛衰記 大坂いなり社内 名古屋市蓬左文庫
 [247] 七月二十七日 近江源氏先陣館 大坂いなり社内 国立国会図書館
 文政六年（一八二三）
 [243] 七月二十五日 奥州安達原 大坂いなり社内 京都府立総合資料館
 [152] 十一月九日 菅原伝授手習鑑 大坂座摩社内 因協会（大阪市立中央図書館）
 [230] の次 十二月二十八日 いろは蔵三組盃 大坂いなり宮社内 同志社女子大学京田辺図書館
 文政七年（一八二四）
 [220] の次の次の次 三月吉日 妹背山婦女庭訓 江戸結城座カ あきる野市五日市郷土館
 文政八年（一八二五）
 [281] 三月 名筆傾城鑑 江戸大薩摩座 早稲田大学演劇博物館
 文政十年（一八二七）
 [203] 五月一日 東鑑御狩巻 大坂稲荷社内芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 [248] 七月十三日 近江源氏先陣館 大坂御霊社内 姫路文学館
 [196] 九月 箱根靈験壁仇討 堺大寺芝居 東京芸術大学附属図書館
 [209] 十一月十九日 祇園女御九重錦 兵庫常芝居 早稲田大学演劇博物館
 [270] 十一月十九日 祇園女御九重錦 兵庫常芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 [270] の次 十一月十九日 祇園女御九重錦 兵庫常芝居 帝京大学メディアライブラリーセンター
 文政十一年（一八二八）
 [209] 四月十六日 鬼一法眼三略巻 大坂御霊社内 某家
 [225] 七月十五日 彦山権現誓助剣 大坂御霊境内 某家
 [297] 九月二十四日 木下蔭狭間合戦 大坂稲荷境内 天理大学附属天理図書館
 [153] 十月二十六日 菅原伝授手習鑑 大坂いなり境内 原道生氏
 文政十二年（一八二九）
 [273] 二月二十六日 軍法富士見西行 大坂御霊社内カ 因協会（大阪市立中央図書館）
 [144] 五月吉日 心中紙屋治兵衛 大坂北の newly 芝居 国立国会図書館
 文政年間
 [208] 木下蔭狭間合戦 江戸カ 早稲田大学演劇博物館
 天保元年（一八三〇）
 [231] 二月十八日 いろは物語 大坂御霊境内 東京芸術大学附属図書館
 [279] 十月二日 源平布引滝 大坂いなり境内 栗東歴史民俗博物館

- [256] 十月十五日 本朝廿四孝 大坂いなり境内 立教大学人文科学系図書館
 天保二年（一八三一）
 [111] 三月一日 四天王寺伽藍鑑 大坂いなり社内 大阪府立大学図書館
 天保三年（一八三二）
 [297] 八月六日 本町糸屋娘 大坂いなり境内 因協会（大阪市立中央図書館）
 [233] 九月十七日 絵本大功記 大坂いなり境内芝居 国立劇場
 天保四年（一八三三）
 [203] 二月十日 一谷嫩軍記 大坂いなり境内 国立劇場
 [116] 三月十四日 酒吞童子話 大坂北ほり江市の側芝居 国立文楽劇場
 [249] 三月十五日 近江源氏先陣館 大坂いなり境内芝居 東京大学教養学部
 天保五年（一八三四）
 [209] 二月十三日 木下蔭狭間合戦 大坂いなり社内芝居 実践女子大学図書館
 [299] の次 二月十三日 木下蔭狭間合戦 大坂いなり社内芝居 神津
 [204] 三月十一日 東鑑御狩巻 大坂いなり社内芝居 大阪府立中之島図書館
 [220] 四月吉日 玉藻前囃袂 京誓願寺芝居 某家
 [148] 五月十日 神靈矢口渡 大坂いなり境内 大阪府立中之島図書館
 [227] 七月十五日 本朝廿四孝 大坂いなり境内 神津
 天保六年（一八三五）
 [195] 二月二十二日 博多織恋鑑 大坂いなり境内 大阪府立中之島図書館
 [202] 八月七日 八陳守護城 大坂稲荷境内 大阪府立中之島図書館
 [203] 八月七日 八陳守護城 大坂稲荷境内 園田学園女子大学近松研究所（今尾哲也氏旧蔵）
 [252A] 八月十七日 大塔宮囃鑑 大坂北の newly 芝居 東京女子大学図書館
 天保八年（一八三七）
 [221] 一月十四日 妹背山婦女庭訓 大坂御霊境内 宮本瑞夫氏
 [284] 三月十七日 恋女房染分手綱 大坂稲荷境内 因協会（大阪市立中央図書館）
 天保九年（一八三八）
 [100] 二月十六日 木下蔭狭間合戦 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学中央図書館
 [228] 三月二十三日 本朝廿四孝 大坂稲荷社内東芝居 広島大学中央図書館
 [203] の次 四月二十八日 八陳守護城 大坂稲荷社内東芝居 日本民謡協会
 天保十年（一八三九）
 [227] 九月二十九日 本朝廿四孝 大坂稲荷社内東芝居 神津
 [230] 九月二十九日 本朝廿四孝 大坂稲荷社内東芝居 某家
 天保十二年（一八四一）
 [204] 一月二日 祇園祭祀信仰記 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学中央図書館
 [222] 閏一月十三日 妹背山婦女庭訓 大坂稲荷境内東芝居 青山学院大学図書館
 本館

- [259] 閏一月二十九日 本朝廿四孝 大坂堀江市の側芝居 東京都立中央図書館
 [268] 六月吉日 三日太平記 京都四条道場芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 [634] 八月十九日 絵本大功記 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学演劇博物館
 天保十二年(一八四二)
 [101] 三月十八日 木下蔭狭間合戦 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 天保十四年(一八四三)
 [925] 四月 仮名手本忠臣蔵 堺南新地芝居カ 札幌大学図書館
 [167] 九月二十七日 太平記忠臣講釈 大坂道頓堀若太夫芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 [965] 十二月吉日 祇園祭礼信仰記 大坂道頓堀若太夫芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 弘化元年(一八四四)
 [269] 三月吉日 三日太平記 京都宮川町芝居 早稲田大学演劇博物館
 [904] 八月吉日 絵本大功記 大坂道頓堀竹田芝居 某家
 [188] 十月十二日 日蓮聖人御法海 大坂道頓堀竹田芝居 津洋
 弘化二年(一八四五)
 [964] 二月吉日 祇園祭礼信仰記 京都四条北側大芝居 早稲田大学中央図書館
 弘化四年(一八四七)
 [923] 三月吉日 妹背山婦女庭訓 京都四条北側大芝居 天理大学附属天理図書館
 嘉永元年(一八四八)
 [112] 一月吉日 四天王寺伽藍鑑 大坂道頓堀若太夫芝居 早稲田大学中央図書館
 [991] の次 四月 五天竺 大坂西横堀清水町浜カ 香川県立ミュージアム(近石泰秋資料)
 [174] 九月吉日 玉藻前囃袂 大坂道頓堀竹田芝居 国立文楽劇場
 嘉永二年(一八四九)
 [985] 正月吉日 由良湊千軒長者 大坂道頓堀竹田芝居 京都大学
 [986] 正月吉日 由良湊千軒長者 大坂道頓堀竹田芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 [234] 九月十八日 日吉丸稚桜 兵庫定芝居 国立文楽劇場
 [933] 三日太平記 大坂カ 某家
 嘉永四年(一八五一)
 [117] 三月吉日 酒吞童子話 兵庫定芝居 東京大学教養学部
 [102] 四月吉日 木下蔭狭間合戦 京都四条北側大芝居 大東急記念文庫
 嘉永五年(一八五二)
 [260] 七月十五日 本朝廿四孝 大坂新築地清水町浜小家 国立文楽劇場
 [178] 九月吉日 蝶花形名歌島台 大坂道頓堀竹田芝居 国立文楽劇場
 [129] 十一月一日 生写朝顔話 大坂新築地清水町浜小家 日本大学学術総合情報

- センター
 [107] 十一月吉日 一谷嫩軍記 大坂道頓堀竹田芝居 明治大学図書館
 嘉永六年(一八五三)
 [130] 二月一日 生写朝顔話 大坂道頓堀若太夫芝居 大倉集古館
 [200] 七月二十三日 双蝶蝶曲輪日記 大坂新築地清水町浜小家 天理大学附属天理図書館
 [204] 九月吉日 八陳守護城 京都四条北側大芝居 日本大学学術総合情報センター
 [205] 九月吉日 八陳守護城 京都四条北側大芝居 成田山仏教図書館
 [270] 十一月吉日 三日太平記 兵庫定芝居カ 早稲田大学演劇博物館
 安政元年(一八五四)
 [118] 二月吉日 酒吞童子話 大坂新築地清水町浜小家 早稲田大学演劇博物館
 [271] 四月吉日 三日太平記 大坂新築地清水町浜小家 明治大学図書館
 [909] の次 四月吉日 近江源氏先陣館 大坂道頓堀竹田芝居 香川県立ミュージアム(近石泰秋資料)
 [992] 閏七月三日 五天竺 大坂博労町いなり境内北の門新席 早稲田大学演劇博物館
 [966] 閏七月吉日 仮名手本忠臣蔵 大坂新築地清水町浜小家 国立歴史民俗博物館
 [168] 十一月吉日 太平記忠臣講釈 大坂新築地清水町 明治大学図書館
 [169] 十一月吉日 太平記忠臣講釈 大坂新築地清水町 瀬戸内海歴史民俗資料館
 安政二年(一八五五)
 [988] 一月二の替り 国性爺合戦 大坂天満裏門常小屋 早稲田大学演劇博物館
 [131] 九月吉日 生写朝顔話 大坂新築地清水町浜 国立劇場
 [197] 十一月十三日 箱根靈験覽仇討 大坂新築地清水町浜 早稲田大学演劇博物館
 安政二三年(一八五五)
 [154] 菅原伝授手習鑑 京都カ 大阪音楽大学音楽博物館
 安政三年(一八五六)
 [206] 一月吉日 八陳守護城 大坂いなり東小家 立命館大学白樺文庫
 [207] 一月吉日 八陳守護城 大坂いなり東小家 神津
 [94] の次 五月吉日 奥州安達原 大坂新築地清水町浜 香川県立ミュージアム(近石泰秋資料)
 [962] 九月九日 鬼一法眼三略巻 大坂稲荷社内 国立国会図書館
 [972] 十月一日 岸姫松響鑑 大坂いなり社内東 早稲田大学演劇博物館
 [222] 十月一日 花上野誉の石碑 大坂いなり社内東 大阪音楽大学音楽博物館
 安政四年(一八五七)
 [139] 一月九日 新うすゆき物語 大坂いなり社内芝居 因協会(大阪市立中央図書館)

- [208] 四月十七日 八陳守護城 大坂あみだ池小家 国立音楽大学図書館
 [035] 五月五日 絵本大功記 大坂いなり社内東芝居 国立文楽劇場
 [225] 七月二十九日 彦山権現誓助剣 大坂いなり社内東 兵庫県立歴史博物館
 [226] 七月二十九日 彦山権現誓助剣 大坂いなり社内東 早稲田大学演劇博物館
 安政五年（一八五八）
 [215] 七月二十九日 花魁咎八総 大坂稲荷社内東小家 早稲田大学演劇博物館
 [216] 七月二十九日 花魁咎八総 大坂稲荷社内東小家 早稲田大学演劇博物館
 [217] 七月二十九日 花魁咎八総 大坂稲荷社内東小家 因協会（大阪市立中央図書館）
 書館）
 [080] 十月五日 源平布引滝 大坂稲荷社内東小家 早稲田大学演劇博物館
 [081] 十月五日 源平布引滝 大坂稲荷社内東小家 広島大学中央図書館
 [271] 十一月十二日 三日太平記 大坂稲荷社内東小家芝居 早稲田大学演劇博物館
 安政六年（一八五九）
 [052B] 三月三日 加々見山廓写本 大坂稲荷社内東芝居 大阪府立中之島図書館
 [052B] の次 三月三日 加々見山廓写本 大坂稲荷社内東芝居 大東急記念文庫
 [119] 五月二十七日 酒吞童子話 堺新地南芝居 早稲田大学演劇博物館
 [120] 五月二十七日 酒吞童子話 堺新地南芝居 国立文楽劇場
 [248] 五月吉日 双蝶蝶曲輪日記 大坂稲荷社内東芝居 東京芸術大学附属図書館
 [249] 五月吉日 双蝶蝶曲輪日記 大坂稲荷社内東芝居 香川県立ミュージアム（近石春秋資料）
 [261] 七月二十九日 本朝廿四孝 大坂稲荷社内東芝居 関西大学図書館
 [009] 九月吉日 伊賀越乗掛合羽 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学演劇博物館
 [005] 十一月吉日 菖蒲前操弦 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学演劇博物館
 万延元年（一八六〇）
 [175] 一月十三日 玉藻前曠袂 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学演劇博物館
 [273] 一月吉日 三日太平記 京都四条南側大芝居 国立文楽劇場
 [113] 二月吉日 四天王寺伽藍鑑 大坂稲荷社内東芝居 京都府立総合資料館
 [114] 三月吉日 四天王寺伽藍鑑 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 [115] 三月吉日 四天王寺伽藍鑑 大坂稲荷社内東芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 [014] 四月十一日 一谷嫩軍記 大坂稲荷社内東芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 [015] 四月十一日 一谷嫩軍記 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 [016] 四月十一日 一谷嫩軍記 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 [180] 九月吉日 道中亀山嘶 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 [135] 十月十一日 菅原伝授手習鑑 大坂稲荷社内東芝居 京都府立総合資料館
 [198] 十一月十五日 箱根靈験甞仇討 大坂稲荷社内東芝居 瀬戸内海歴史民俗資料館

料館
 文久元年（一八六一）

浄瑠璃本（通し本）の配役書入本の効用

- [103] 一月十一日 木下蔭狭間合戦 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学演劇博物館
 [148] 五月五日 神靈矢口渡 大坂稲荷社内東芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 [149] 五月五日 神靈矢口渡 大坂稲荷社内東芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 [209] 八月一日 八陳守護城 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 [210] 八月一日 八陳守護城 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学演劇博物館
 [232] 十一月四日 姫小松子日の遊 大坂稲荷社内東芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 文久二年（一八六一）
 [121] 一月十三日 酒吞童子話 大坂いなり社内東小家 大東急記念文庫
 [122] 一月十三日 酒吞童子話 大坂いなり社内東小家 大阪音楽大学音楽博物館
 [036] 五月五日 絵本大功記 大坂いなり社内 国立文楽劇場
 [132] 八月四日 生写朝顔話 大坂いなり社内東ノ小家 国立文楽劇場
 [133] 八月四日 生写朝顔話 大坂いなり社内東ノ小家 国立文楽劇場
 [044] 十月二十日 奥州安達原 大坂いなり社内東小家 国立文楽劇場
 [273] 十一月吉日 三日太平記 堺新地南芝居 国立文楽劇場
 文久三年（一八六二）
 [033] の次 一月十一日 妹背山婦女庭訓 大坂いなり社内東小家 Aガーストル氏
 [010] 三月三日 伊賀越乗掛合羽 大坂稲荷社内東芝居 早稲田大学演劇博物館
 慶応元年（一八六五）
 [227] 五月二十五日 彦山権現誓助剣 大坂いなり東小家 因協会（大阪市立中央図書館）
 [211] 五月吉日 八陳守護城 大坂天満戎門 国立文楽劇場
 [170] 十一月十三日 太平記忠臣講釈 大坂いなり社内東小家 大阪市立中央図書館
 慶応二年（一八六六）
 [034] 一月十三日 妹背山婦女庭訓 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 [082] 五月十七日 源平布引滝 大坂稲荷社内東芝居 東京都立中央図書館
 [050] 七月二十九日 近江源氏先陣館 大坂稲荷社内東芝居 国立文楽劇場
 慶応三年（一八六七）
 [011] 四月二十日 伊賀越乗掛合羽 大坂稲荷社内東芝居 松竹大谷図書館
 [245] 九月二十七日 ひらかな盛衰記 大坂稲荷社内東芝居 大阪音楽大学音楽博物館
 明治元年（一八六八）
 [002] 二月吉日 妹背山婦女庭訓 京都四条道場北ノ小家 某家
 [034] 三月吉日 義経千本桜 京都四条道場北ノ小家 某家
 [191] 閏四月二十六日 日本賢女鑑 大坂いなり東芝居 因協会（大阪市立中央図書館）
 [192] 閏四月二十六日 日本賢女鑑 大坂いなり東芝居 国立文楽劇場

- [037] 七月二十九日 絵本大功記 大坂稲荷社内東芝居 東京大学教養学部
 明治二年(一八六九)
- [211] の次 二月三日 八陳守護城 大阪いなり東芝居 鳥越文蔵氏
 [134] 五月五日 生写朝顔話 京都道場北ノ小家 早稲田大学演劇博物館
 [145] 九月吉日 心中紙屋治兵衛 大阪いなり東芝居 早稲田大学演劇博物館
 [274] 十一月吉日 三日太平記 大阪いなり東芝居 愛媛大学附属図書館
 明治三年(一八七〇)
- [156] 一月吉日 菅原伝授手習鑑 大阪いなり東芝居 国立文楽劇場
 [157] 一月吉日 菅原伝授手習鑑 大阪いなり東芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治四年(一八七一)
- [176] 二月吉日 玉藻前囃袂 大阪松島芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治五年(一八七二)
- [123] 三月吉日 酒吞童子話 大阪松島千代崎町芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 [124] 三月吉日 酒吞童子話 大阪松島千代崎町芝居 国立文楽劇場
 [125] 三月吉日 酒吞童子話 大阪松島千代崎町芝居 国立文楽劇場
 [218] 七月吉日 花魁苔八総 大阪いなり文楽芝居 香川県立ミュージアム(近石
 春秋資料)
- [219] 七月吉日 花魁苔八総 大阪いなり文楽芝居 早稲田大学演劇博物館
 [132] 九月吉日 生写朝顔話 大阪松島文楽座 国立文楽劇場
 明治七年(一八七四)
- [103] の次 三月吉日 木下蔭狭間合戦 大阪道頓堀竹田芝居 大阪音楽大学音楽博
 物館
- [912] 三月吉日 木下蔭狭間合戦 大阪道頓堀竹田芝居 某家
 [212] 四月吉日 八陳守護城 大阪松島芝居 大阪大学附属図書館
 [246] 六月吉日 ひらかな盛衰記 大阪松島芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 [135] 七月吉日 生写朝顔話 大阪堀江芝居 早稲田大学演劇博物館
 [177] 九月吉日 玉藻前囃袂 大阪松島芝居 国立劇場
 [926] 十一月吉日 彦山権現誓助剣 大阪松島芝居 某家
 明治八年(一八七五)
- [083] 六月二十四日 源平布引滝 大阪松島芝居 早稲田大学演劇博物館
 [220] 九月吉日 花魁苔八総 大阪松島芝居 因協会(大阪市立中央図書館)
 [006] 十一月一日 伊賀越道中双六 大阪松島芝居文楽座 早稲田大学演劇博物館
 明治九年(一八七六)
- [038] 十月吉日 絵本大功記 大阪大江橋席 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治十年(一八七七)
- [906] 三月一日 仮名手本忠臣蔵 大阪松島文楽座 某家
 [104] 九月吉日 木下蔭狭間合戦 大阪大江橋席 東京大学総合図書館
- 明治十一年(一八七八)
- [158] 二月吉日 菅原伝授手習鑑 大阪御霊社内小家 国立劇場
 [228] 五月一日 彦山権現誓助剣 大阪松島文楽座 成田山仏教図書館
 [006] 十月十九日 伊賀越道中双六 大阪松島芝居文楽座 早稲田大学演劇博物館
 明治十二年(一八七九)
- [093] 五月吉日 五天竺 大阪御霊文楽座 大阪市立中央図書館
 明治十五年(一八八二)
- [006] 十一月二十一日 伊賀越道中双六 大阪松島芝居文楽座 早稲田大学演劇博
 物館
 明治十七年(一八八四)
- [006] 十一月一日 伊賀越道中双六 大阪いなり彦六座 早稲田大学演劇博物館
 [136] 六月一日 生写朝顔話 大阪いなり北門彦六座 東京芸術大学附属図書館
 [82] 六月一日 那須与市西海祝 大阪いなり北門彦六座 大阪音楽大学音楽博物館
 [918] 九月吉日 菅原伝授手習鑑 大阪御霊文楽座 某家
 明治十八年(一八八五)
- [104] の次 二月二十日 木下蔭狭間合戦 大阪御霊文楽座 帝京大学メディアライ
 ブラリーセンター
- [288] 三月吉日 義経千本桜 大阪御霊文楽座 国立文楽劇場
 [126] 四月吉日 酒吞童子話 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治十九年(一八八六)
- [140] 一月二十九日 新うすゆき物語 大阪いなり彦六座 大阪市立中央図書館
 [066] 二月二十日 祇園祭礼信仰記 大阪松島文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 [051] 十一月三日 近江源氏先陣館 大阪松島文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治二十年(一八八七)
- [089] 二月四日 国性爺合戦 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 [199] 十月吉日 箱根靈験鬪討 大阪御霊文楽座 大阪市立中央図書館
 明治二十一年(一八八八)
- [914] 七月二十六日 生写朝顔話 大阪いなり彦六座 某家
 [193] 九月吉日 日本賢女鑑 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
 [194] 九月吉日 日本賢女鑑 大阪御霊文楽座 大阪市立中央図書館
 [073] 九月三十日 契情小倉の色紙 大阪御霊文楽座 東京都立中央図書館
 [074] 九月三十日 契情小倉の色紙 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 [299] 十一月吉日 本朝廿四孝 大阪いなり彦六座 東京都立中央図書館
 [275] 十二月一日 三日太平記 大阪御霊文楽座 東京都立中央図書館
 明治二十二年(一八八九)
- [141] 二月吉日 新うすゆき物語 大阪御霊文楽座 国立劇場
 [105] 三月一日 木下蔭狭間合戦 大阪御霊文楽座 国立文楽劇場

- [106] 三月一日 木下蔭狭間合戦 大阪御霊文楽座 東京都立中央図書館
 [127] 五月吉日 酒吞童子話 大阪御霊文楽座 鳥根大学法文学部
 [063] 十月一日 鬼一法眼三略巻 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治十三年(一八九〇)
 [235] 一月二日 日吉丸稚桜 大阪いなり彦六座 東京大学教養学部
 [025] 一月十九日 妹背山婦女庭訓 大阪御霊文楽座 国立文楽劇場
 [026] 一月十九日 妹背山婦女庭訓 大阪御霊文楽座 東京都立中央図書館
 [018] 四月十三日 一谷嫩軍記 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治三十四年(一八九一)
 [184] 六月二十日 夏祭浪花鑑 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 [071] 六月二十日 祇園女御九重錦 大阪御霊文楽座 国立文楽劇場
 [083] の次 十月吉日 源平布引滝 大阪御霊文楽座 兵庫県立歴史博物館
 明治十五年(一八九二)
 [262] 二月四日 本朝廿四孝 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [263] 二月四日 本朝廿四孝 大阪御霊文楽座 国立劇場
 [935] 三月二十日 義経千本桜 大阪御霊文楽座 某家
 [085] 四月二十二日 恋女房染分手綱 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
 [086] 四月二十二日 恋女房染分手綱 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 書館)
 [137] 七月吉日 生写朝顔話 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 [078] 十月十二日 粧水絹川堤 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 明治十六年(一八九三)
 [159] 三月吉日 菅原伝授手習鑑 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [027] 四月二十四日 妹背山婦女庭訓 大阪御霊文楽座 国立劇場
 [028] 四月二十四日 妹背山婦女庭訓 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
 [189] 十一月十七日 日蓮聖人御法海 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 明治十七年(一八九四)
 [220] の次 一月二日 花魁咎八総 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [221] 一月二日 花魁咎八総 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [142] 三月十六日 新うすゆき物語 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [128] 四月吉日 酒吞童子話 大阪御霊文楽座 国立劇場
 [200] 十月一日 箱根靈験甞仇討 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
 [201] 十月一日 箱根靈験甞仇討 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 明治十八年(一八九五)
 [213] 一月三十日 八陳守護城 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [236] 九月二十八日 日吉丸稚桜 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [237] 九月二十八日 日吉丸稚桜 大阪御霊文楽座 鳥根大学法文学部

浄瑠璃本(通し本)の配役書入本の効用

- 明治二十九年(二八九六)
 [039] 一月一日 絵本大功記 御霊文楽座 鳥根大学法文学部
 [276] 九月八日 三日太平記 御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 明治三十年(一八九七)
 [929] 七月一日 ひらかな盛衰記 御霊文楽座 某家
 明治三十一年(一八九八)
 [029] 三月二日 妹背山婦女庭訓 大阪御霊文楽座 因協会(大阪市立中央図書館)
 [083] の次の次 六月十九日 源平布引滝 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [251] 九月十一日 双蝶蝶曲輪日記 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
 [059] の次の次 九月吉日 鎌倉三代記 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 明治三十二年(一八九九)
 [019] 九月五日 一谷嫩軍記 御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 明治三十三年(一九〇〇)
 [905] 十一月一日 絵本大功記 大阪御霊文楽座 某家
 明治三十四年(一九〇一)
 [160] 一月吉日 菅原伝授手習鑑 大阪御霊文楽座 Aガーストル氏
 明治三十五年(一九〇二)
 [067] 一月一日 祇園祭礼信仰記 大坂御霊文楽座 国立劇場
 [067] の次 一月一日 祇園祭礼信仰記 大坂御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [067] の次の次 一月一日 祇園祭礼信仰記 大坂御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 物館)
 [185] 六月六日 夏祭浪花鑑 大坂御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [186] 六月六日 夏祭浪花鑑 大坂御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 明治三十六年(一九〇三)
 [264] 三月二日 本朝廿四孝 大坂御霊文楽座 瀬戸内海歴史民俗資料館
 明治三十七年(一九〇四)
 [926] 四月十日 彦山権現誓助剣 大阪御霊文楽座 某家
 明治三十八年(一九〇五)
 [936] 三月一日 義経千本桜 大阪御霊文楽座 某家
 [238] 四月十五日 日吉丸稚桜 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
 [040] 十一月一日 絵本大功記 大阪市の側堀江座 札幌大学図書館
 明治四十年(一九〇七)
 [928] 一月二日 日吉丸稚桜 大阪御霊文楽座 某家
 [908] 五月十九日 鎌倉三代記 大阪御霊文楽座 某家
 [194] の次 五月十九日 日本賢女鑑 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
 [229] 九月吉日 彦山権現誓助剣 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
 [927] 九月吉日 彦山権現誓助剣 大阪御霊文楽座 某家

- 明治四十一年(一九〇八)
- [903] 三月一日 妹背山婦女庭訓 大阪御霊文楽座 某家
- [915] 九月十七日 生写朝顔話 御霊文楽座 某家
- [916] 九月十七日 生写朝顔話 御霊文楽座 某家
- [902] 九月十七日 芦屋道満大内鑑 御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
- 明治四十二年(一九〇九)
- [901] 五月十六日 伊賀越道中双六 大阪御霊文楽座 某家
- [931] 九月十日 本朝廿四孝 大阪御霊文楽座 某家
- [907] 十一月一日 仮名手本忠臣蔵 大阪御霊文楽座 某家
- 明治四十三年(一九一〇)
- [989] 二月二十三日 義経千本桜 大阪御霊文楽座 国立文楽劇場
- [924] 五月十四日 八陳守護城 大阪御霊文楽座 某家
- [923] 六月十七日 箱根靈験覺仇討 大阪御霊文楽座 某家
- 明治四十四年(一九一一)
- [161] 二月二十一日 菅原伝授手習鑑 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
- [922] 九月二十日 双蝶蝶曲輪日記 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- 大正元年(一九一二)
- [911] 九月二十二日 恋女房染分手綱 大阪御霊文楽座 某家
- 大正二年(一九一三)
- [929] 四月一日 日吉丸稚桜 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [919] 六月一日 太平記忠臣講釈 大阪御霊文楽座 某家
- [968] 九月二十日 祇園祭礼信仰記 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [910] 九月二十日 祇園祭礼信仰記 大阪御霊文楽座 某家
- [953A] 十月二十六日 加々見山廓写本 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- 大正三年(一九一四)
- [957] 三月二十六日 仮名手本忠臣蔵 大阪御霊文楽座 国立文楽劇場
- [138] 六月十八日 生写朝顔話 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
- [920] 九月二十三日 一谷嫩軍記 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [947] 十月三十日 ひらかな盛衰記 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- 大正四年(一九一五)
- [265] 四月十八日 本朝廿四孝 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [958] 十月二十三日 仮名手本忠臣蔵 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
- 大正五年(一九一六)
- [162] 一月二日 菅原伝授手習鑑 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [930] 三月十四日 妹背山婦女庭訓 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [107] 十月一日 木下蔭狭間合戦 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [913] 十月一日 木下蔭狭間合戦 大阪御霊文楽座 某家

- 大正六年(一九一七)
- [907] 三月一日 伊賀越道中双六 京都竹豊座 早稲田大学演劇博物館
- [230] 三月十五日 彦山権現誓助剣 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- [936] 四月十八日 義経千本桜 大阪御霊文楽座 某家
- [906] 九月二十二日 本朝廿四孝 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- 大正七年(一九一八)
- [911] 三月二十三日 玉藻前曦袂 京都新京極竹豊座 某家
- 大正八年(一九一九)
- [932] 一月一日 本朝廿四孝 京都竹豊座 某家
- 大正十二年(一九二二)
- [969] 十月五日 仮名手本忠臣蔵 大阪御霊文楽座 早稲田大学演劇博物館
- 昭和元年(一九二六)
- [143] 二月四日 新うすゆき物語 大阪御霊文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
- 昭和六年(一九三一)
- [900] 四月一日 日蓮聖人御法海 大阪四ツ橋文楽座 大阪音楽大学音楽博物館
- 昭和十四年(一九三九)
- [171] 八月十七日 太平記忠臣講釈 東京明治座 早稲田大学演劇博物館
- 昭和二十五年(一九五〇)
- [922] 三月九日 玉藻前曦袂 東京新橋演舞場 某家